

榎
糸

T u - N a - G u



2 0 2 6 年 — 第 1 1 号 —

繫 第11号／目次

創作

万博旅行

内角秀人

4

プーランクのソナタ

深井 了

18

ハブ人間の巣
―前編―

藤野 繁

20

らせん

門倉 まり

26

南の部屋

むらい はくどう

44

合評会案内

あとがき

57

58

万博旅行

内角秀人



「万博、楽しみだね」

母が小娘のように声を弾ませて言った。

母とすでに嫁いでいる妹と私の三人で旅行をするのは、ここ数年我が家での恒例行事になっていた。今回は妹の仕事の関係もあり、五月の第二週の土日に母のたつての希望で、関西へ旅行することとなった。メインは万博見物である。それで土曜日の早朝、富山発敦賀行きの新幹線に乗った。

「土曜日は一日万博見物をして、京都に泊まり、日曜日は嵐山ね」

妹は張り切って計画を立てていた。その旅程は最近還暦になったばかりの私や年齢の母には少しハードな予定のようにも思えた。でも、妹は一度こうと決めたら譲らない強い性格の持ち主だった。母も私もそうと知っていたから、黙って従うことにした。

「おはようございます」

小松駅で妹が乗って来て、私たちと合流した。妹と私は五歳違いである。

「兄ちゃんばかり、ずるい」

妹は母方の縁者では初孫だった私がいろいろと優遇されるのに不服を唱え、何かと張り合って成長した。

富山市から石川県能美市にすでに嫁ぎ、女兒二人にも恵まれ、大手企業のサラリーマンの旦那と仲睦まじい生活をしているが、それでも時折幼き日の性分が常日頃言動となつて表れていた。

敦賀駅で、大阪行きのサンダーバードに乗り換えた。「預けるほどの大きい荷物がないから、そのまま万博会場に行けるわ」

この旅行のリーダー気取りの妹が言った。母と私は黙って頷いた。荷物は私と妹がリュックを背負い、あとは母の肩掛けの小型カバンがあるだけだった。これなら、このまま万博会場にも入れそうだった。歩き回るのに、十二分な格好だった。

大阪の天気はどうだろうか。私は春物の薄手セーターの下にＴシャツを着て、暑くなつても対応ができるようにしていた。母も妹も同じく軽装だった。予報では曇りのようであつたが、人に聞くと、それでも大阪は富山よりかなり暑いらしい。水分補給用のお茶のペットボトルもしっかりリュックに人数分備えていた。

大阪駅に着き、環状線に乗り換え、弁天町駅に向かった。土曜日の朝だというのに、人が多い。いや、休日だからこそ人が多いのか。これが都会の朝というものだったか。久々に大阪に来て、私は思った。弁天町

駅から地下鉄に乗り継いで、万博会場の最寄り駅である夢州駅まで行く。妹が交通系ＩＣカードを用意してくれていたので、地下鉄に乗るのにいちいち切符を買う手間が省けた。便利なものだ。

夢州駅。ここも人が多い。田舎暮らしに慣れ切った私は目が回りそうだった。地方から出てきたということとを人には悟られたくはないと思った。外国人観光客も大勢いた。

長いエスカレーターを上がる。上がると、そこは万博会場の東ゲートだった。

「午前十時に入場できる予約をしているからね」
逸る口調で妹が言った。弁天町駅を出発した時点で、

すでに午前十時を数分過ぎていた。しかし、入場を待つ観客でゲート前には長い行列ができていた。そういうえば、入場するだけで一時間近くかかるらしいと、テレビのニュースが言っていたような気がする。じりじりした気持ちで入場待ちの長い行列の最後尾について。手荷物検査があるようだ。それに手間取って、長い行列ができているみたいだ。天候は予報通り、曇り。暑くもなく、寒くもない。

三十分ほど過ぎて、私たちの順番が近づいてきた。

見ると、ペットボトルなどの水分の入った容器はあらかじめ荷物から出して、提示しなければならないようだ。それを母と妹に言うのと、

「オロナミンCの瓶を肩掛けかばんに入れて持って来たけど、大丈夫かね」と、母があっけらかんと言った。

「えーっ」

私は啞然とした。瓶なんて、そんな物を持ってきたなんて、聞いていない。悪気が無いのだろうけれども少し腹が立った。

程なく、自分たちの番が来た。列の関係から、私は妹と母と別れて検査を受けることになった。ペットボトル三本をリュックから出した。

「これは未開封ですか？」係員に訊かれた。

「はい、そうです」

「だったら、大丈夫です」

私は無事入場ゲートを通過することができた。QRコードのついた入場券チェックも大丈夫だった。先に通過できたので、妹と母を待っていると、妹の姿は確認できたが、母がいない。

「お母さんは？」

合流した妹に私が訊くと、

「オロナミンCを飲んで瓶を処理してくるって」

と、険しい表情で言った。大丈夫だろうか。ここで離ればなれになってしまわなければいいが……。

はらはらした気分で待っていると、母がどうにか姿を現わした。

「お待たせ」

こちらの心配をよそに平然としていた。人の気も知らないで。そのへん、母は無頓着だった。昔から。若い時から。

とりあえず、入場はできた。

「さて、どうする？」

私は妹に訊いた。とにかく、会場内も人、人、人である。どこをどう歩いたものか、わかったものではない。そうでなくても、私は今回の万博にはあまり関心がなかった。今回のというのは、私は前回一九七〇年に同じ大阪で開催された万博に行っているからだ。まだ幼稚園児で、五歳の時だった。三年前に他界した父に連れてきてもらった。岡本太郎デザインの太陽の塔が幼き心ながらも印象的だった。一方の母と妹の女性陣は前回の大阪万博には行っていない。妹はその万

博の年に生まれたわけだから、行っていないくて当然であるが、何か事あるごとに自分が連れていつてもらえていなかったことを父に責め立てていた。それだけに、今回の万博旅行には妹も母も並々ならぬ心持ちでいるようだった。特に、母はもう古い先短い年である。

私は今回の旅行に関して、すべて妹と母に任せて自分は追従することに決めた。だから、いざ万博会場に着いて見物を開始しようとしても、自らは足が動かなかったのであった。

妹は私のそんな氣を知ってか知らずかそそくさと歩き出した。母と私は従った。人混みを掻きわけて、進んだ。東ゲート近くに公式マスコット「ミヤクミヤク」の像があった。妹は早速そこで写真を一枚撮った。どこかの国のパビリオンに入りたいな、と心の中で思った。歩きながら辺りを見渡してみると、どここのパビリオンもすでに長い行列ができていた。妹から渡された万博会場の俯瞰地図には、パビリオンに入るには予約が必要なところが多かった。

「日本館に予約を入れているから」

妹が言った。それが午後四時半だという。まだまだ時間があつた。予約を入れているのは日本館だけで、

後は先着順で待ち人数が少なそうなどところに入るつもりらしい。私は何も言わず、ただ妹と母の向かう先へ歩を進めた。

大屋根リングの下に入り、それに沿って歩いた。妹はかなり早足だった。おかげで、私はすでに疲れていた。日ごろの運動不足がたたっていたせいもあるかもしれない。無職の独身年金生活者で富山市の市営住宅で母と二人暮らしている。日中何をするでもなく、常にぼーっとしていて、たまにパソコンに向かってはネットサーフィンをしたり、下手くそな小説を書いたり、また、好きな本を読んで過ごすたらな生活を送っていた。運動とは無縁だった。その点、母は毎朝「ウォーキング」と称して、近所周辺を歩き回り、足腰を鍛えていた。それで、私より健脚なのかもしれない。妹は昔から運動能力に優れ、また母と私より若い分元氣はつらつだった。

「どこかパビリオンに入ろう」

私は休憩を取りたい意味でも自分の希望を口にした。「どこでもいいの？」妹が訊いた。

「どこでもいい」

私は投げやり氣味に答えた。これ以上無目的にあち

こち歩き回るのは勘弁して欲しかった。

歩いていると、比較的行列が短いパビリオンがあった。ハンガリー館だった。

「今ならそれほど並ばずに入れますよ」

呼び込みの男性が叫んでいた。

「ここに入ろう」

私は渡りに船とばかりに提案した。ハンガリーという国にとりたてて親近感があったわけでもなかった。とにかく一旦足を止めて休憩を取りたかった。

三十分ほど待って、中に入れた。中で催し物があるらしく、七十人区切りで入場することになっていた。ちやうど私たちの直後で区切られた。私たちは最後尾になった。ハンガリー人と思われる女性が数人入場客対応をしていた。いずれも洗練された綺麗な妙齡の女性たちであった。日本語も上手かった。

館内に踏み入れた。木工の掲示物があり、国全体の意思表示として、自然との調和をモットーとしていることが窺われた。

メインは暗闇の中の円形ステージでの民族音楽の披露だった。女性歌手が一人で歌った。言葉がわからないので歌詞の意味がわからなかったが、歌声からは情

感がひしひしと伝わってきた。興味深いショーだった。

ショーが終わると、退館した。パビリオンを出る前に、トイレを借りた。

「次、どこへ行く？」

私の問いに答える前に、妹は黙ってすたすたと歩き出していた。せっかくの念願の万博だから観たい物がたくさんあると言いたげに。

私の足は少し回復したが、またすぐ疲れだした。自分で自分の足が情けなかった。

吉本興業のパビリオンに来た。オーブンステージになっていた。所属の若手芸人らしき者が何かやっていった。妹は歩を休める間もなく、観客席を横切つて素通りしていった。母と私もそうした。そうせざるを得なかった。妹は有無を言わず、前を進んでいく。何か目的の場所があるのだろうか。歩く速度を緩めない。

しばらく歩くと、威勢のいい掛け声が聞こえてきた。万博会場地図に目を遣る。どうやら入場した東ゲートと真逆の西ゲートまで来たらしい。潮風が薫ってきた。海が近いようだ。そして、法被姿の男性女性がやけに目に付くようになった。掛け声のする方向に足を向けると、そこはEXPOアリーナで、地元大阪の祭り神

興が一堂に会していた。大阪の町内会有志がそれぞれの神輿を担いでいた。

「わっしょい、わっしょい」

非常に活気があった。私は少し圧倒される感じがした。

「少し観ていきましょう」

妹が人工芝を敷き詰めてある観覧スペースに腰を下ろした。私はホッとした。歩くのに限界が来ていたからだ。私も腰を下ろし、座り込んだ。母も座った。私はリュックを背中から外した。

アリーナ会場内を練り歩く神輿の行列を眺めた。

いろいろな神輿があった。神輿の一番上に立って、担ぎ手を扇動している者がいた。神輿が傾いても、足で踏ん張り、よろけるようなことはしない。強靱な足腰をしているのだ。相当鍛錬を積んだか、慣れしているに違いなかった。まだ若い男だった。私にはできそうもなかった。しばし、眺めていた。

「ここでお昼を食べましょう」

母が提案した。時計を見ると、午後零時を若干過ぎていた。時間の過ぎるのは早い。そういえば、お腹もすいていた。

私はリュックの中から今朝母が早起きして作った海苔巻きを取り出した。万博会場内での飲食物は高いし、かなり並ばなければならぬと聞いたので家から用意してきたのだ。

食べた。ペットボトルのお茶も飲んだ。

「これで、少しリュックも軽くなるでしょう」

母が笑顔で言った。母の作った海苔巻きは相変わらず美味しかった。あつという間に平らげた。母も妹も美味しそうに食べていた。三人でこうして食べていると、幼き日に戻った気がした。昔三人で富山でのチンドンコンクール見物に出かけたことを思い起こさせた。

神輿の行列は止めどもなく続いていた。次から次へと新たな町内会の神輿が私たちの前を通り過ぎていった。元氣とパワーをもらえるようだ。私も元氣を出さなければ。

「そろそろ行きますか」

妹が腰を上げた。どこへ、と私が訊く間もなく、すでに動き出していった。私も立ち上がった。祭りの会場を後にした。

風が強く吹いていた。私たちはまた歩いた。私は足が痛かった。だが、兄として、男として、そのことを

口に出したくはなかった。老齡である母が同じ条件で同じ環境の下、黙々と文句を言わず歩いているのだから。

またどこかのパビリオンに入りたいと思うが、ここも長い行列ができていた。途中、妹がベルギー館の御土産ショップでチョコレートを買った。そこだけは比較的すいていた。

風が本当に強かった。そんな中、

「大屋根リングの屋上に登りたい。せつかく来たんだし」

妹がポツリと言った。

「そうよねえ。そうしましょう」

母がそれに続いた。まだ歩かされるのか。私はうんざりした。それでも二人に付き合うしかなかった。

ベルギー館近くのエスカレーターから上った。上るにつれ、風がますます強くなっていた。大屋根リングの屋上は二重構造になっており、上ったその上にもさらに通路があった。風で眼鏡が吹き飛ばされそうだと私は左手で眼鏡を押さえながら歩いていった。

さらに上の大屋根リングの通路に上った。万博会場が一望にできたが、風が強いのでそのうち突風でも来

たら吹き飛ばされるのではないかと私は気が気でならなかった。

「素晴らしいわねえ」

母が感嘆していた。私は景色どころではなかった。

「どこまで歩く気だ？」

私は妹に訊いた。

「大屋根リングを一周するつもり」

妹は事もなげに言った。おいおい、やれやれ。私は深くため息をついた。

「そういうええ、お土産を買わなきゃねえ」

母が素朴な口調で言った。

「公式のお土産ショップならば、さつき、通り過ぎて来たわよ。なんでさつき言わないの」

妹は子供を叱るような口調で母に言った。でも、今日の主役は母なので、母の主張に従わざるを得ない。

「連れていってよ」

母は重ねて哀願した。

「仕方ないわねえ」

妹は大屋根リングのウォーキングに未練たらたらである。私は楽ができるなら、どちらでもよかった。

エスカレーターで地上に降りた。トイレに寄り、小

用を足した。お土産ショップを目指して、進まなければならぬ。私は気合を入れ直した。

先ほど通り過ぎたお土産ショップに戻るのには億劫だった。またかなり歩かなければならない。自分たちの現在位置を地図で確かめ、別のお土産ショップを目指して歩くことにした。妹もどこにその場所があるかわからないみたいだった。

「大阪に來たのだから、たこ焼きも食べてみたいわねえ」

母がまた勝手なことを言い出す。

「うん、食べたいねえ」

私は少しでも休めるならば、と母に同調した。妹は呆れた顔をした。

少し歩くと、たこ焼きが売っている飲食物のショップがあった。ちょうどテラスの席が一空空いていた。ここで少し休もう。

「ここにいるから、たこ焼きを買って来て」

私は妹に頼んだ。現金千円を渡す。ちなみに万博会場内では現金は使えないが、この際気持ちを示すためにも千円札を渡した。私がテラス席の場所取りをし、母と妹がショップ内に消えた。そんなに並ばなくても

買えそうだった。

「お待たせ」

五分も経たずに、妹と母がたこ焼き二人分を持ってやって来た。一人分七百円だったらしい。私はお釣りを受け取らなかつた。妹は食べないようだ。たこ焼きは作り置きしていたもののように、あまり温かくなく、それで美味しさが半減していた。

「そんなに美味しくないわねえ」

母も愚痴りながら食べていた。妹は黙ってそんな母と私を眺めていた。

たこ焼きを乗せてきたトレーを返却し、空き容器と箸を捨てる必要があつた。妹が持つていった。その間、母がお土産ショップはどこにあるか、近くにいた明らかに万博のスタッフでないどこかの業者の男性に聞いていた。

「麻美ちゃん、ちよつと、ちよつと」

母がよくわからないらしく、戻ってきた妹を大声で呼んだ。妹はそのことが気に食わなかつたらしい。

「田舎者みたいな真似をしないでよ。恥ずかしい」

憤慨していた。実際私たちは田舎者なのだが、私には妹の気持ちも理解できた。母には恥じらいや遠慮という概念がどこか欠落している部分があつた。常日頃

から。

「五十八番、五十八番」

母は仕入れた情報を鼻歌でも歌うように口ずさんでいた。五十八番というのは、大屋根リングの柱に記している番号だ。その近くにお土産ショップがあるらしい。

「行くわよ」

妹は怒りの表情を隠さず、席を立つて歩き出した。母と私は付き従った。

大屋根リングの下を歩いた。今いるのは七十二番だった。歩くにつれて、その番号が小さくなっていた。歩きながら、大屋根リングはつくづく素晴らしい建物だと思った。日本の誇りだ。今回の万博のいわゆる一つの象徴的な建造物と言えた。

五十八番に来た。するとそこには万博会場の案内図があり、スタッフの女性が一人立っていた。

「お土産ショップに行きたいのですけど」

女性スタッフは懇切丁寧に教えてくれた。どうやら入場してきた東ゲートの近くにあるらしい。私たちは祭りの会場からまた正反対まで歩いてきたのだ。よく歩いてきたものだ。足も痛くなるわけだ。

スタッフの女性に礼を言い、また歩いた。人波は減っていない。むしろ増えているような気がした。

どうにか、お目当てのお土産ショップに到着した。中に入ることはすぐにできたが、とある百貨店の系列であるお土産ショップの店内は、万博会場や夢州駅周辺よりさらに混雑していた。人がぎゅうぎゅう詰めで、ゆっくり落ちて着いて商品を見る暇などないくらいだった。

そんな中、母はかごを持ち、バスケットを八箱も入れた。私は妹と顔を見合わせた。母は旅行先で大量にお土産を買うことがよくあり、この日もその癖が抜けきっていないようだった。

「そんなにたくさん買っても明日も歩き回るのだし、荷物運びしないうよ」

私が諫めるように言うと、母は、

「私が持つ」

と、強がりを言った。私と妹は母の性分だと半分諦めていた。

いざ、会計に進もうという段階になって、

「あれ、こっちの方が安い」

と、棚に違う商品を見つけ、今までかごに入れた商品

をすべて置いてあった棚に戻し、安い商品をかごに入れる作業を行なった。それらを行なったのは私だった。人でごった返す中、恥ずかしくもあり、店の人間からするとはた迷惑な行為だっただろうと思った。

会計を済ませ、店を出た。私は大きな荷物を持った傍若無人な母と離れて歩きたくなくなった。母は私のそんな気を知らずに満足そうだった。

時刻は午後三時少し前。

「日本館の予約は午後四時三十分だからね」

と妹が念を押した。ただ、もうあちこち歩きまわる体力が完全に切れかけていたので、まだ少し早いが向かうことにした。

日本館の隣りに、ウーマンズパビリオンがあった。

「まだ時間があるから、ここに入りましょう」

妹が言った。並ぶ時間は四十分ぐらいだった。女性が世の中で存分に活躍し、明るい未来を信じさせるパビリオンだった。

午後四時十五分になって、日本館にも入った。予約をしていたので、すんなり入れた。予約をしたことの証明のために、入場券のQRコードを掲示する必要がある。持っていてよかった。ずばらな私はもうい

ないだろうと思い、捨てようとしていたところだった。

日本館では持続可能な未来社会のためのバイオテクノロジーの取り組みを紹介していた。火星の石も展示されていた。興味深かったが、私はひどく疲れていて、早く宿に帰り着きたいと思っていた。

「もういいだろう。帰ろう」

私は自分の正直な気持ちを妹に伝えた。宿の京都のホテルまで早くたどり着きたかった。

京都までは、まず夢州駅から地下鉄で本町へ行き、地下鉄を乗り継いで新大阪まで。そこからJRの新快速に乗った。私はもうくたくただった。

「夕食はどうする？」

と、妹が訊くので、

「今の時間、店はどこも一杯だと思うから、手軽に弁当でも買ってホテルの部屋で食べようよ」

と、私は提案した。外食するにしても値段が高つくし、私はもうとにかく一刻も早く休みたいの一心だった

「京都に来たのだから、抹茶のソフトクリームが食べたい」

京都駅に着いた時、母がまた、わがままとも取れる発言をした。早く宿について寛ぎたい私は顔を曇らせ

たが、妹はもう慣れっこのようだった。京都駅構内をしばらく歩くと、目当ての抹茶のソフトクリームを売っている茶屋のような店があった。目的を達するのにそれほど手間取らなかつたので、私は少しほっとした。茶屋の店内で三人抹茶のスフとクリームを食べ、隣にあった弁当屋で夕食用の弁当を買い、宿であるホテルに向かった。ホテルは京都駅八条口のすぐ真ん前であつた。

「あー、疲れた」

ホテルの部屋に入つた際、私はすぐにベッドに倒れ込んだ。今日は朝から本当によく歩いたものだ。日頃運動不足でもあつたが、それでも急激にたくさん歩いたものだから、身体も悲鳴を上げるわけだ。万博会場で母と妹に振り回される格好になつたわけだから、精神的にも疲れていた。妹が装着していた万歩計は二万二千歩余りを記録していた。

テレビを眺めながら、夕食の弁当をかき込んだ。質素にも思える夕食だったが、明日の朝はバイキング料理だし、昼は妹が予約してあるという京都市内の料理店に行くので我慢することにした。

大浴場でひと風呂浴びて、早々に床に就いた。

「明日も歩き回るからね」

妹の言葉にうんざりしながら、疲労を少しでも軽減できるよう熟睡したいと思つた。

明けて、日曜日。この日も晴れてくれてよかった。私は昨日の疲れを引きずつていたが、妹は元氣いっぱいのように、朝食のバイキング料理を食べた後、チェックアウトまで時間があつたので、

「ちよつと近くを散歩してくる」

と言つて、部屋を飛び出していった。私より若くて体力があるとはいえ、なんて元氣なのだろう。妹は幼少の頃からそうだった。赤ん坊の頃から私は母の乳の出が悪く脱脂粉乳で育つたが、妹は母乳ですくすく育つた差だろうか。そんな妹が羨ましかつた。

チェックアウトをして、ホテルを出た。

「今日は嵐山のトロツコ電車に乗るからね」

妹が厳しい声で言つた。私は覚悟を決めた。

京都駅からJR嵯峨野線で嵯峨嵐山駅へ。京都は観光の名所ということで、朝早くから人出が多い。外国人も多い。

妹は先頭に立って、黙々と歩く。私は母の手を取つて、重いお土産の荷物を持ちながら付き従う。街道に

沿って、歩いた。すでに観光客目当ての店屋が多数開いていた。

天龍寺の前を横切った。尚も歩く。

「どこまで行くんだ？」

私は昨日の疲れが残っていることもあり、苛立たし気に妹に訊いた。

「予定通り、オルゴール堂よ」

妹はこともなげに言った。

オルゴール堂は渡月橋を渡ったところにあつた。私は付き合いきれなかつたので、店の外で待つことにした。暑くなってきたので、春物セーターを脱ぎ、Ｔシャツ姿になった。

「わっしょい、わっしょい」

この日は近隣地区の祭りの日らしく、可愛らしい神輿を引っ張った児童の群れが掛け声とともに通り過ぎていった。

「お待たせ」

妹が買い物を済ませ、出てきた。来た道を戻ることになった。私は靴擦れができたらしく、歩くスピードが遅くなった。

「これから山道を登るから」

妹が私の弱りかけた心身に追い打ちをかけるようなことを言う。私は歯を食いしばった。途中人力車のお兄さんがおり、頼むといくらぐらいになるか聞いてみたが、遙か想定外の高額だったので丁重にお断りをした。

竹林の道に來た。平生であれば鑑賞に値する素晴らしい眺めであつたが、今の私にはその余裕がなかつた。休みたい、休みたいと思いながら一歩、また一歩と足を進めた。

どうにか、トロツコ嵐山駅にたどり着いた。売店があり、ソフトクリームを売っていたので、また買つて食べた。トロツコ電車は十分ほど遅れているとのアナウンスがあつた。

「想定外だわ」

妹が苦々しく呟いた。昼食の予約時間に間に合わないという。でも、ここまで来て、この期に及んで、トロツコ電車に乗らないという選択はなかつた。

十分以上遅れて、トロツコ電車が駅に着いた。乗つた。満員だった。指定席を予約していたので、座ることができた。

溪谷の中を、トロツコ電車が走る。若葉が鮮やかだ

った。景色は最高だ。保津川ではカヌーや川下りを楽しむ人々がいた。秋の紅葉の季節もきつと美しいだろう。私はトロツコ電車からの眺望を十二分に堪能した。トロツコ亀岡駅に着いた。ここから五百メートルぐらい歩くという。しかも、早歩きで。妹の話によれば、昼食の予約時間かなり遅れているらしい。携帯で先方にその旨を伝えていた。

「どうしても、そこへ行かなきゃならないのか」

疲れがピークに達している私はその苛立ちを爆発させた。

「予約しているからね」

別にキャンセルしてもいいのに、と心の中で思いながらも、私は足を渋々動かしていた。母も言葉数が少なくなっていた。

JR馬堀駅から二条駅へ。地下鉄に乗り換えて三条京阪駅へ。時刻は午後一時を過ぎ、

何とか予約していた店に着いた。先斗町の隠れ家的なシックな店だった。座敷席に通された。農家直送野菜と海鮮の手毬寿司御膳を人数分予約注文しており、程なくそれを食べた。確かに野菜が新鮮で美味しかったが、疲労のせいかな、それほどよく味がわからなかった。

「ここを出たら、もう京都駅に行こうな」

一足先に食べ終えた私は、帰ることばかり考えていた。一刻も早く休みたい。

「ちよつと待つて。デザートが来るから」

妹が制した。

一番最後に母が食べ終わった後、ろうそくを立てたケーキの皿を持って店員が現れた。

「はい、どうぞ」

店員が三つの皿をテーブルに並べた。大きな皿で、真ん中に小さくスポンジケーキが乗っており、脇にはチョコレートチューブでそれぞれ文面が記してあった。

妹の皿には、「ようこそ関西万博へ」。

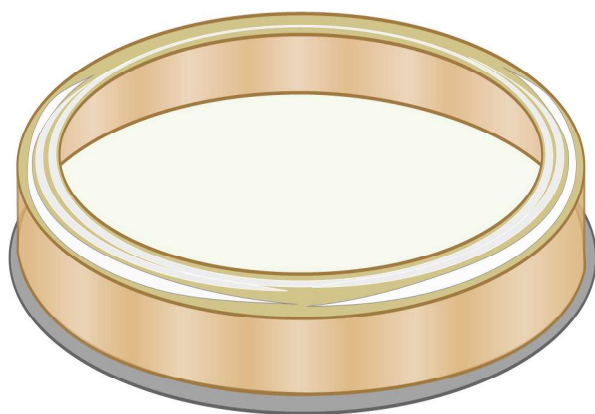
私の皿には、「還暦おめでとう」。

そして、母の皿には、「母の日ありがとう」。

やられた、と思った。私はいつしか自分のことばかり考えていて、家族への感謝の気持ちを忘れていた。妹の心遣いに感服した。特に今回の主役は母だったのだ。

私たち兄妹は幼い時分より、母に苦勞をかけつ放しだった。今回せてもの親孝行と、旅行を企画したはずだった。母は齢八十三歳、いつまでも長生きして欲

しいと切に願う。



プーランクのソナタ

深井 了



ステージの上では、写真で見ていたよりも、大柄な女の子が、肉付きのいい、力強そうな肩を出して、やや前かがみになり、小さな音を出していた。小さな、というよりも、二階席にいる私には、遠い音のように流れていた。私はかなり疲れていて、第一楽章がすごい緊張がある迫真の演奏であつたことを思っていた。その思いの向こうに、ヴァイオリンの音は、小さく遠く、ステージの大柄な女性も、ドレスの青緑色だけが少し明瞭で、遠い存在だった。

最近、演奏会はこんなことが多い。疲れているからか、六十歳と言う年齢のせいかな、眠りとの境界で曲を聴いているのだ。実際眠ったことも一、二度あるが、多くはその手前で、気の遠くなる状態で聴いている。そして、私と音楽の間には、というよりも、私の眼の前には、夢に似た、曲とは関係のない、私の脳の産物としか考えられない画像が浮かんでいた。今日も目の前ではないが、三階の席の一番ステージ寄りの空間に、銀色の金属性の枯木を写

したオブジェが浮かんでいた。それはかなり手のこんだ計算された作りで、銀色の技の皮は、いぶされて、澱んで、それが作品全体と調和されたように作られていた。ところどころ、それらの技をつないで、これもいぶされた赤色と、緑色の濃いテープのような板切れが斜めに置かれていた。だから、痩せ枯れた存在であったが、どこかクリスマスツリーを連想させていた。

ハブ人間の巣

―前編―

藤野 繁



仕事ばかりで、くそ真面目な男。才木盛男はまさしくそんな人間であった。

地元の鉄道資本の系列広告社に入社し、マスコミ広告部門で新聞の一枠一枠を、テレビCMの動かないスライドスポットを、誰もが敬遠したがる、かき集めの広告屋を、愚直に二十一年間やってきた。新聞社やテレビ局から持ち込まれる企画を、アタックリストに従って、ひたすら回って頭を下げてきたのである。今から三十年前、才木は四十歳を迎えていた。

当時、電通や博報堂の二大広告社を業界では「電・博」と呼んだ。この二社で日本の広告費のほぼ半分を押さえているのである。

恰好のよい一ページの新聞広告、意表を突くテレビCMが話題になるが、盛男には無縁であった。一度はそんな広告を取り扱ってみたいと夢みたが、ついぞ二十一年間、協賛型の利根的な広告集めばかりしてきたような気がする。毎日反吐が出るような思いをこらえながら、客先に協賛をお願いした。

長年、営業をして数百社のスポンサー広告を扱っていると、変わった客にも遭遇する。

坂舟は県西部のスキー場の支配人であった。テレビや新聞広告の打ち合わせに出向くと、五分ほどで原稿

指示を済ませ、あとは遊びの話であつた。パチンコの話題になり「今の若い連中はスキー場に来なくなりつつある。何故か。スノーボードをやり始めた奴がパツタリ来なくなつたので、どこへ行つたか調べると、パチンコ・スロットを覚えていた。パチスロにはまると、スキーに行くのがあほらしくなる。鼻輪を付けたたり、耳輪を付けたりする奴がパチスロにはまる。その内、金が無くなりサラ金に走る。人間、借金をするようになると、まずスキー場には来ないよ」それが坂舟の持論であつた。

坂舟がやり始めたのはオールナイト営業であつた。これならパチンコ店が終わつてからでもスキー場に行ける。坂舟の読みはあたり一晩で百万を越す売り上げが増収となつた。オールナイト券をテレホンカードに印刷することで話題となり、テレビや新聞に無料のパブリシテイ（話題やニュース）に取り上げられた。本来ならスポンサーから喜んでもらえると思いがちだが、坂舟はひどく面倒くさがり、しぶしぶ対応していた。手配に時間を掛けた広告社の盛男にはそれが不満であつた。

テレビスポット広告は基本秒数が十五秒で富山県エリアのゴールデンタイムの定価が二十万である。たつ

た五本流して百万円になるのでは、計算上はそうなるが定価で販売流通することはほとんど無く、精々定価率で三十%、ゴールデンタイムで一本六万位であらう。坂舟は盛男にスキー場オープンとオールナイト営業の告知に百万円のスポット発注をした。早朝から深夜まで幅広い全日枠取りで一本約二万五千円、約四十本放送である。サンタをキャラクターにしたポスターやCM映像はすでに仕上がっており、それをベースに、オープンの文字スーパ―を入れるのだ。テレビスポットの枠取りを進め、素材を映像会社で作りテレビ局に入れた。十二月中旬スポット放送が開始され、クリスマスイブと翌日はオールナイトスポットに切り替える。それが終わると年末年始篇に差し替えて行くべきところ、盛男の指示ミスで二十六日、二十七日になつてもオールナイト篇が流れた。客はスキー場に押しかけ、オールナイトを要求する。現場はかなり混乱したようだ。盛男は坂舟からこの混乱の件を電話で受けた時、——大変なことになつた。補償ものだな——と、重い鉛のような絶望感で心が塞がつた。

ところが坂舟は盛男に「才木さん、気にするな。逆に混乱でいい宣伝になつた」そう言い放つたのだ。坂舟と盛男は懇親の度合が一気に深まつた。

一度打ち合わせを富山市内ですることとなり、パチンコ店に來い、と坂舟から連絡がはいった。出向くと四十分食事休憩の札を入れて、店に隣接するラーメン屋に一緒に行った。

「スキー場のオールナイトで売上百万円の現金を数えてもチリ紙と同じ。パチンコで勝つ一万円の方がよっぽど金の価値がある。才木、金なんてそんなもんや」

坂舟に手ほどきを受けて、盛男は甘デジパチンコを覚えた。通常台は大体大当たり確率が三百分の一であるが、甘デジはその四分の一の確率で大当たりが出る。しかし出玉数も四分の一なのだ。大体の目安だが五、六千円で大当たりが出て運よく続けば元か一万ぐらいになってチョイ勝ちだが、出ない台にはまったら一万ぐらい注ぎ込むとまず回収できない。ひどいときは三万、四万と負けがこむこともある。通常台につながる、いわゆるヘビューザーは、甘デジの三倍から四倍のつぎ込みをしている、とみていい。

仕事は週休二日だから本来なら土曜はゆっくりできるが、盛男は甘デジにはまってから、家にいることがほとんど無くなった。家に居てもパチンコの、あの甘デジの大当たりの、魚群がサーと流れる瞬間の快感がよみがえるのだ。家にじっとしていらなくなってい

た。妻には「仕事が残っている」と嘘を告げて会社へ行く。営業の仕事は金曜までにひと段落しているか、エンドレスで次の仕事が続いている。これから始まる粹埋めのことを思い出すと気が滅入るが午後からの甘デジに入る前に、仕事をしているふりをして時間つぶしをする。コーヒーを飲んで、パソコンの画面を見つめる。

ふと坂舟の言葉がよみがえった。

——いいか才木、甘デジ行くなら午後二時以降だ。大体朝から行く奴は、その時間に一文なし、いわゆるオケラになる。それからザーッと台を回れ。二百回以上回っている台を探せ。良く回る台は千円で十五回は回るから一万円以上投下している台になる。それが無い場合は我慢してコーヒーでも飲んで時間をつぶすか、あきらめて帰るかだ。これが分かれ道だ——

盛男はこの分かれ道でつまづいた。家に帰れないのである。コーヒーを飲んで時間をつぶそうとするが、うずうずしてすぐ台についてしまうのである。

坂舟の言いつけを守れば、盛男は大きな借金を抱えることは無かったかもしれない。

週末の土曜日、盛男は富山駅前のパチンコ店に通いつめた。一年間約五十回行って収支を取ってみた。約

四十万円のマイナスであった。しかし現実はその倍近いマイナスになっていた。八十万のマイナスをサラ金の高い金利が雪だるまのように膨らんで二年ほどで三百万近い借り入れを、サラ金やクレジットで借り入れていた。手を打たねば自己破産する恐怖で、労金で一本化を図ったがすぐに挫折してしまった。

坂舟に出会ったころはまだ三十代であった盛男も初老を超えて四十代半ばになっていた。くそ真面目な仕事ぶりは変わらず、また盛男を支援して広告を出してくれる顧客も増えて、盛男は魚津営業所長となった。

いつも財布には金が無かった。無理もないのだ。毎月二十五日に給料が振り込まれ、その翌日、妻から五万小遣いを貰う。その小遣いが翌日一万になってしまふ。盛男は追い込まれていた。

盛男が履歴書を書いたのは二回である。

長く勤めている現在の鉄道系の広告社の入社試験と、にっちもさっちも行かなくなって始めた新聞配達員のアルバイト募集に応募して書いたのが二回目である。

その時、会社では課長職で年収は五百万であった。

新聞販売店の社長にアルバイト動機を聞かれ、接待などで小遣いが足りなくなっていると、真面目に答え

た。

盛男の計算では、月八万のアルバイト料から五万を月々の返済に回し、約三年でサラ金・クレジットの高利の部分二百万を完済する見込みであったが一年で返済出来たのは、見込みの半額で盛男は愕然とした。

会社はダブルワークを禁止している。確定申告の際には、現在の五百万の年収と配達アルバイトの年収約百万を合算して所得申告して税を支払わなくてはならない。合算して特別徴収すると、会社にアルバイトがばれてしまう。切り分けて行けば行くほど余計な軽費と心理負担が掛かってしまう。百万稼いで三十万ほど所得税が引かれてしまうような塩梅である。アルバイトは割に合わない、とわかるまでに一年があつという間に過ぎていった。

毎晩八時ごろに帰宅して、晩酌と遅い夕食を摂り、夜十時に寝込んで深夜二時過ぎに起きて販売所へ向かう盛男に妻は、やめてくれと懇願して泣いた。

新聞配達を始めたのがゴールデンウィークごろで半年ほど経った大雨のある夜、配達先前で車を止めたところで、大きなトラックが交差点を横切っていた。

なんだか真珠をばら撒いたような煌めきが道路上で川のようになった雨水に無数に点在する。かたつむりの

子供たちであつた。盛男の目に涙があふれ、——お前
ら何してんだ、つぶされてしまうぞ——と叫んで、無
数のかたつむりをすくっては横の田んぼの水路に入れ
た。何度も、何度も……



らせん

門倉 まり



「祐介行くよ」

姉が声を掛けてくれた。

夕ご飯の買い出しに駅前の格安マーケットへ行く。

戸外へ出ると人がじろじろ見るのに心音は平気で僕を連れて歩く。僕が変だからってそんなにじろじろ見られても困る。僕だってふつうの人と同じように、生まれたからには生きなければならぬ。世間の人はケイタイという玩具のような物体を耳に当てる盛んに喋っている。羽咋は田舎だが、駅や歩道でそうやって喋りながら歩いている人をよく見かける。せわしない様子だ。突然音楽が鳴ると、心音も歩きながら携帯を取り出し素早く耳に当てる。一度見た光景だ。

瞬間、僕は緊張した。

心音は言葉を空に向かって発するように、顔を仰向けて口を開けたり閉じたりしている。そして声を出して笑った。寒いから吐く息が白くなっている。笑い声を聞いて僕はほっとした。いつかのように心音が泣くかと思ったのだ。

羽咋川沿いの土手を体をゆっくり揺らしながら歩いた。心音が喋りながら先を歩いて行く。甲高い女の人の声がときどき携帯から漏れてくる。姉がまた笑い声

を上げた。仕事場の友達だろう。楽しそうだ。

言葉がわからない自閉症の僕にはあの道具は必要ないものだ。携帯というあの道具は、いつかのように心音を泣かせもするし、今日のように人を楽しませることもある。僕は姉のポニーテールを眺めながら後ろから付いて行く。川風が冷たい。僕は思わず首を縮めた。羽咋川に架かる汐見大橋を渡ったところで信号待ちをする。横断歩道の向こうの人も何人か携帯を耳に当てたまま突っ立っている。僕は空を見上げた。曇った冬空だがこの広い空間にどれほど多くの電波が飛び交っているんだろう。目に見えない電波はどんな形をしているのだろう。僕が受け取るのはオレンジ色のらせん形だ。それを僕は身体を反らして胸で受け止める。道具なんていらぬ。言葉もいらぬ。メッセンジャーは電波のようなせんだ。くるくるくるくる空間を回転しながら胸の中にすこーんと飛び込んでくる。瞬間、軽い衝撃が全身をつらぬき、じいーんと体全体が熱くなる。伝言が全身から脳へ伝わる。誰からの伝言なのかって？ もちろん宇宙人さ。

校庭の木にピンク色が溢れていた季節に、特別支援学校を卒業した。先生が「さくら」とか、「咲いたなあ」とか言っていた。なぜ喜んでいたのかわからなかった。

それから時給二百円の作業所に通うようになって五カ月が過ぎた。

『ひまわり障害者作業所』は静かだ。

僕はここが気に入っている。本当はもっと騒がしくても不思議ではない。僕と同じ十八歳から六十歳までの障害者がたくさん働いているのだから。それだけみんな真面目で熱心だってことだ。

僕の持ち場は卵のパック詰めとシール貼りだ。息を凝らして一生懸命やる。冷房があっても額が汗ばむ。施設長は姉の心音に似ている。若くて背が高くてすらりとしている。頭が競馬場の馬のお尻だ。尻尾があるから。心音も頭の後ろに馬の尻尾をつけている。施設長の尻尾がゆらゆら揺れている。僕たちに指図するため顔や体を動かすからだ。僕らが気付いていない失敗を見つけたら、どうするのが正しいか教えるとき、首も上下左右に動かすから、本人は知らずとも尻尾の先が揺れている。お昼休み同僚とお喋りしながらお弁当を食べるとき、口や顎を動かしてもそうなるのだろう

か。健常者とはなんとせわしないものか。

自閉症の僕は一見静かだ。ところが自分の内部に閉じ籠もっていてもちゃんと感じているのだ。人の好き嫌い、出会う人の心の温かさ冷たさ、特に愛には敏感だ。人の話す言葉も聞こえているが、内容を理解できないだけだ。姉の五歳年下の僕は十八歳だが、

「きみは自閉症でも知能指数はえらく高いんだってね。サヴァン症候群かな？　よかつたね」と中学生のとき、特別支援学校の肢体障害者の同級友が教えてくれた。

誉めてくれたらしいが聞き流した。知能と人格は別だから。僕には僕の哲学がある。生産性がなくても、知能が低くても、どれだけ一生懸命かで人は評価されるべきだ。人の価値はそこにある。それに、たとえ僕が言葉で表現できなくても愛は伝わるものだ。自分が大切にされているという実感は、明日も生きようという希望に繋がる。今のところ祖母と心音と施設長からそれをもらっていると感じる。言葉がなくても心が通じ合う相手だ。石ころだって愛は感じるんじゃないかな？

人の目は絶対見ない。視線を合わせない。死ぬほど怖いから。大好きな心音とも、おばあちゃんとも。父の顔はなおさら……。僕は姉の後ろにまわる。髪の毛の長

い女性が好きだ。毎朝髪をブラッシングする心音を眺める。大きな、または小刻みな手の動きにつれて揺れる髪の毛先だけじっと見ていると、陽だまりに温もりが溜まるように幸せな時間が充電される。

「はい、おしまい」と言われて僕は洗面所から茶の間に戻される。姉は洗面所の鏡に向かってお化粧する。朝七時半。姉が仕事に行く時間だ。

髪に指をからませてくるくるさせてもらえると、とても嬉しい。姉は洗髪したとき乾く間たいい本を読んでいる、後ろにまわった僕に黙ってそれをやらせてくれる。くるくるした僕の人差し指を引き抜くと、パーマをかけた毛先が連なつて丸い輪を作つてほどこける。丸い形が好きだ。僕にとつて「丸」や「円」は穏やかであること、脅かおびやされないことの、いわゆる「平和」のシンボルだ。心が安定する。指から離れてするりとほどこける髪の毛の動きも素敵だ。何十回でも、何百回でもやつてみたくなる。年寄りで寒がりの祖母も、夏であっても夜になると首に巻く、サマーマンで編んだ手編みのマフラーを触らせてくれる。かぎ針で編んだ楕円形の細かい網目をなぞる指の感触が心地良い。うつとりして永遠に触つていたくなる。

「はい、おしまいじゃ」と言つて、祖母は『母の日』

に心音が買つてあげたエプロンをせわしなく付けて台所に立つ。夕食のおかずを料理するついでに、心音と僕の明日の弁当の下拵えをする。僕が施設の迎えの車に乗っていなくなったら内職もするから忙しいのだ。

運転手さんは男性だ。男性は髪も短いし声も大きいから苦手だ。父親が特に嫌いだったからいなくなつても平気だ。酒を飲むと家族を殴つてばかりいた。ある日、家を出て行つたきり帰らなくなつた。隣の家のおばさんが言うには、どこかの飲み屋の女と一緒にゐたらしい。僕はほつとした。母は僕を生んだのと引き換えに、とうの昔に夜空の星になつた。施設長の顔をまともに見たことはないが、きつと星になつた母に似ている気がする。

言葉をうまく使えないので人とコミュニケーションできなくても、施設長は僕が「人の視線」と「大きな音」と「まぶしい光」が死ぬほど嫌いなことをちゃんとわかつていて、僕を必ずブラインドを閉じた窓の傍に座らせてくれる。だから僕は肅々と仕事ができるのだ。

全神経を集中させて丁度白い卵のてっぺんに載るように黄色いひまわりの花のシールを貼り付ける。集中しすぎて指が少し震えるほどだ。小さな花のシールで

見違えるほど卵が生き生きして、これじゃ透明なパックに入つた十個入りの卵をスーパーのお客さんが買いたくなる気持ちがよくわかる。僕と心音も同じ気持ちになる。僕らが駅前スーパーで買ったパック入り卵を冷蔵庫に入れて置くと、祖母が卵焼きを作ってくれる。割る前に年寄りの菱びた片手で卵をかざして、「祐介の卵じゃわい」と言うから僕は嬉しくなる。公立羽咋病院から姉が羽咋川の汐見大橋を自転車まで渡つて帰つて来るまで「ボクの卵」で作つた黄金の卵焼きは大皿に盛られ、厳かに卓袱台の上に鎮座している。菜っ葉の味噌汁もできた。

今頃土手沿いの砂利道の振動で、心音の尻尾はさかんに跳ねているだろう。夕方の涼しい川風が姉の白い瓜実顔にまんべんなく当たつて気持ちいいだろう。目だけ抜かして（僕は人の目が嫌いなんだ）姉の顔は、楕円形の卵に似ているから好きだ。早く帰つて来い！僕の心は踊る。早く家族みんなで食べたいな。心音が「おいしいね」と言うのと、僕はオウム返しに「おいしいね」と返す。「しょむなかつたかな？《味がうすかつたかな》と祖母が言う」と「しょむなかつたかな？」とそのまゝオウム返しに言う。オウム返しは自閉症児の癖で、相手の言葉はわかつていないのだが、何と

く胸が温かくなる。『ボクの卵』だからなおさらだ。僕は誇らしい気持ちになる。

言語療法士の姉は、家の中で祖母としよっちゅう染しそうに喋っている。笑っている。病院では脳溢血で命を取り留めたが言葉を忘れた人に言葉を教えているらしい。姉が患者さんに使う絵カードを手作りしているのを見るのは好きだが、僕はどうしても絵を言葉にできない。生まれつき脳の機能が人と違うのだろう。ふたりの会話に入れなくても、僕が家族の一員だということ忘れていなくて、姉と話している最中、祖母は「ほれ、祐介はどっちじゃ？」と皿の上に載った三角形に切り分けた西瓜すいかを選ばせてくれる。せっかく素晴らしく丸くて大きかった西瓜が、バラバラに解体されていて悲しい気がしたが、僕は先っぽが赤い一番大きそうなのを取る。心音は障害者だから可哀想と特別扱いなんてしないタイプだから、一番大きい西瓜を争って姉とじゃんけんになることもある。僕は姉がふつうの弟のように扱ってくれるのが嬉しい。羽咋川の土手沿いに建っていて、冬になると隙間風が冷たい借家だが、ここが僕の居心地の良い場所だと感じる。外で出会う人のようにじろじろ見られることも、ヘンに同情されることもない。生まれながらの僕でいられる。

それにしても、じゃんけんの意味がわからない僕はいつも負けてしまうから損なんだけどなあ――。

羽咋はU F Oの町だ。

石川県能登半島の付け根（西側）にある羽咋市は、僕たちが遠足で行った地元の正覚院というお寺のお坊さんの言葉どおりなら、江戸時代から未確認飛行物体の目撃例があつた場所だ。この寺の高齢の住職さんは、特別支援学校の生徒であつても健常児に話すのと同じように丁寧に説明してくれた。

「このお寺にある『氣多古縁起』という古文書こもんじよに載っている不思議な物語が『そうはちぼん』が空を飛んだという『そうはちぼん伝説』なんじゃ。江戸時代、羽咋市の眉山びじょうさんの辺りで夜な夜な不気味に光って飛ぶ物体が、まるで『そうはちぼん』という仏具の妙鉢そうぼちという楽器に似ていてな。それが東から西へ、羽咋の六所の宮から一の宮の六万坊ろくまんぼうへ、群れになつて移動したんじゃ。神通力を用いて自由自在に現れては消え、消えては現れる楕円形の火の玉だつたそうじゃ」

僕は住職さんの言つた言葉は、一言一句を正確に覚えてるが、（数字や漢字や言葉を瞬時に覚えるのは得

意なんだ）何のことを話したのか中身はわからなかった。言葉は記号のようで、言葉の意味が理解できないのだ。寺の境内に立っている立て札の難しい漢字も、形を記号として記憶するからあとで真似して紙に書けもするのだが、何という字なのか読めないし、意味もわからない。ただ僧侶の、人をわけへだてしない人柄と、誠実さと、親切な心が僕らに伝わった。

現在人口2万人の小さな町で空飛ぶ円盤を見た人があるのだろうか。特別支援学校の級友たちが見たとしても、彼らは僕と同じで『コミュニケーション下手』だから、他者に「見た」「何を」「どんなだった」と正確に伝えられはしない。

人はなぜ円盤を見るのだろうか。僕は人がとてつもなく悲しいとき、命に係わる危機に遭ったとき、円形や楕円形の空飛ぶ円盤を見るのだと思う。江戸時代、庶民の生活は毎日苦しくて（きつと親のいない僕んちより貧乏で）、窮乏を極め、飢饉もあり、一級河川の羽咋川は氾濫することもあっただろう。＂そうはちばん＂が群れになって空を飛んだとき、この地域にとっても悲惨なことがあったのだろう。火の玉のような円盤を見た人がたくさんいたのだろう。人々は救いを求めて、安寧を願うあまり、集団的深層心理のうちに人類の普

遍的無意識として幻を見るように円盤を見たのではないかしら。考えることは好きで、いろいろ考えるのだが、僕のこういう考えは言葉にできないから、人に伝えられないから、僕の心の中の呟きにしかないのだが――。

僕は夜半に生まれたそうだ。僕の命と引き換えに母さんが星になったとき、僕がまだ目の見えない生まれだての赤ん坊でなかったら、きつと夜空に空飛ぶ円盤を見ただろう。

一九九六年、『そうはちばん伝説』にちなんで羽咋駅裏に、半球形のドーム型『コスモアイル羽咋』が町興しの目的で建てられた。本物の宇宙船や月へ行ったロケットが展示されている宇宙科学博物館だ。「UFOの町」として宣伝されると、金沢市の観光客や県外の見物客で羽咋は賑わうようになったが、僕はあそこに宇宙人はいないような気がした。携帯が大流行した二〇〇年代になっても、宇宙人から電話が掛かったという住民は誰もいなかった。

「祐介行くよ」

いつものように姉が声を掛けてくる。

祖母がいなくなつてから姉の家事が増えた。羽咋病院から帰りぎわ、どうせ通る駅前だからさつさと買い物して来てもいいのに、姉は一旦家に帰つて来て家に引き籠もっている僕を誘う。

「男が家に引つ込んではいかんよ。」

いつまでもめそめそしとらんが。ばあちゃんが悲しむ。ばあちゃんは星になつて祐介を見とるからね」

あの日から祖母がいなくなつた。

あの日、まだ真冬でもないのに川風がえらい冷たくて朝から寒かつた。黒々とした禍は降つて湧いたように人を襲うものだ。僕には人が死ぬという意味がわからなかつた。

祖母は突然動かなくなつて、菊の花が詰まつた箱の中に入つてから焼き場へ行つてまったく姿を消した。クモ膜下出血だったという死亡診断書なんかどうでもいい。この家からいなくなつた。代わりに、心音は卓袱台に骨壺と祖母の小さな遺影を置いた。僕たちに仏壇を買う力はなかつたから――。

毎日父のお猪口に水を、小皿に飯を盛つた。心音は「おばあちゃん、食べようね」と合掌してからご飯を

食べた。僕はご飯を食べられないようになった。写真を眺めながら僕は（父ならよかつたのに）と思つた。

祖母が死んでから僕は眠れなくなつた。仕事に行かず家に閉じ籠つた。姉は僕を勤務先の公立羽咋病院の精神診療科へ連れて行つた。

「ショックで軽い鬱になつたんでしよう」と、抗不安薬と睡眠薬を処方された。

「悲しかったね」と言つて、やさしい医師は励ますように僕の肩を軽く叩いた。

悲しんでいたのではない。

僕は怒つていたのだ。

祖母は僕の世界を理解していた。自閉症だから父親が「こいつはバカだ」と僕を殴つても、「おまえの方がバカじゃ！ 祐介は喋れんだけで利口な孫じゃ！」と、瘦せた体を盾にしてパニック発作を起こして叫んでいる僕を庇ってくれた。父がいなくなつてこの家は天国だった。貧しかろうが、川の土手沿いで借家に吹き込む隙間風が冷たかろうが、家が古くて汚かろうが、仕事から帰つて来ると祖母がいた。ここは世界で一番安心な場所だった。それなのに……

ひどいじゃないか！

僕が作業所から帰宅したとき、祖母は台所で横向きに寝たままだった。「ばあちゃん」「あーあつ！」と聞こえたかもしれない」と、いつものように声を掛けなくても返事がなかった。

目を閉じた顔が紫色になっていた。激しい頭痛の発作で意識が朦朧もうろうとしたのか、サマーヤーンのマフラーをむしり取っていた。吐瀉物で口元が汚れていた。僕は何を叫んだのか覚えていない。僕の声を聞いて慌てて玄関から入って来た送迎車の運転手さんが携帯で救急車を呼んだ。すかさず羽咋病院にいる姉に連絡した。パニック発作を起こした僕はあとのことをなにも覚えていなかった。

ひどいじゃないか！ 僕は何度も心の中で繰り返した。ひどいじゃないか！ 突然返事もなくなるなんて！ ばあちゃんは僕が嫌になつてどこかへ行つたんだ。父親と同じだ。僕を捨てたんだ。愛しているふりをして本当は僕のが嫌いだつたんだ。家族を裏切つたんだ。マフラーは祖母の首に巻き付いているから、祖母の匂いが染みついているから、触っていると僕を落ち着かせたのだ。外でどんな辛いこと、嫌なことがあつても、家に祖母がいてマフラーの体臭を嗅ぐと安心できた。「はい、おしまいじゃ」と言われても、明日

も頑張ろうという気持ちになつた。

僕はご飯が食べられないだけでなく、眠れなくなつた。卓袱台の写真を前にして、座つたまま体を揺らし黙つて壁に後ろ頭を打ち続けていた……。

医師から処方された眠り薬を飲んで寝入ったとき夢を見た。せつかく心音が連れて行つてくれた病院だから、素直に抗不安薬も飲んでいた。夢のなかで、

UFOに乗っているのだとわかつた――

祖母を失つた悲しみがあまりに深かつたから、僕は眉丈山びじやうさんの彼方に空飛ぶ円盤を見るところか、自分が円盤の内部に吸い込まれてしまつたのだ。目映まばゆいほど明るかつた。しんと静まりかえつていた。宇宙人はいなくて僕は一人だつた。突然ピカピカの壁に丸い窓のようなものがすると開いた。かまぼこ状の空間の中央に立っていた僕は、引き寄せられるように窓に歩み寄つて外を見た。青く美しい惑星があつた。じっと見惚れていると、強烈な感情に襲われて涙がとめどなく流れた。姉が傍にいれば「それは言葉にすると『郷愁』というんだよ」と教えてくれただろう。

すると、円盤の中には誰もいなくて、声も聞こえな

いのに、誰かの話し言葉がゆるやかに僕の頭の中に入ってきた。不快ではなかった。宇宙人だろうか？

自閉症の僕には言葉を理解できないはずなのに、夢のなかで僕はふつうの人の（たぶん宇宙人だろう）言うことがわかったのだ。宇宙人はこんなことを言った。「泣くがいい、祐介……悲しみに大きいも小さいもない。悲しみは純粹だ。悲しみに重い、軽いはないのだ。黒人の涙も、白人の涙も、有色人種の涙も同じく尊い。われわれも地球とそこに住む人間たちのために共に泣こう。見た目は青々といかに美しくとも、地球がいかに知性ある生物を育ててきた惑星であろうとも、そこは地獄だ。丸い美しい地球のどこかで戦火が絶えた時がない。空には破壊と人殺しのミサイルが飛び交い、地上は瓦礫で埋まり、人は爆撃され、拷問され、虐殺されている。それを同胞どうしでやっているのだ。地球人同士が殺し合っている。戦火を絶やすことなく、果てしなく繰り返している。なんという醜さよ。われわれは空の高みから眺めているのだ。なんという愚かさよ。素晴らしい知力で文明を築いたにも拘らず、生み出された発明はことごとく武器に変わり、殺し合いに貢献している。文明国を謳いながら、おのれの利益のためなら平気で恥知らずな嘘をつき、同胞を差別や偏

見で退け、人間の憎悪を煽り、殺戮をエスカレートさせている。なんとという野蛮さ——地球人の負の本能、人種差別、エゴイズム、残酷さが、黒い霧さながらに地球から立ちのぼっている……」

そのあと静かになって、僕は声の主が無言で涙を流している気がした。——宇宙人も泣くのだと思った。

僕は中学生になると自閉症という障害はどこから来たのだろうと考えるようになった。僕が生まれたのは偶然だろうか？ もしかして自閉症は人類が生み出したものではないだろうか？ 僕たちのような人間が必要だから生まれてきたような気がしていた。

僕らだけではない。健常者であろうが障害者であろうが、人にはそれぞれ存在する理由があり、役割があるはずだ。夢のなかで僕は確信していた。僕らには必要なのだ。なぜなら、僕らは宇宙人とコンタクトがとれるから……なぜかしら、普通の人よりストレンジャーとの接触が容易な気がした。僕たちは常に排除される立場にあるが、決して排除する側の人種ではないからだろう。

宇宙船の内部に入って、僕は地球上で、いや宇宙で、悲しくて泣いているのは自分一人ではないと知らされた。宇宙人だって泣いているのだ。悲しみに大きい小

さいはないという大いなる倫理をもつ宇宙人が、空から僕たちを観察している気がした。空から僕たちは見られている。そしてばあちゃんを責めるのは間違っている、それは僕のエゴイズムだとわかった――。

――目が覚めたとき心音の隣で僕は自分の布団にくるまっていた。

祖母が亡くなって四十九日が経った。正覚院のお坊さんは（亡くなった年寄り住職さんの跡取り息子だった）墓もない、仏壇もない我が家へ来て嫌な顔ひとつ見せずに、卓袱台の骨壺に向かって御経を上げてくれた。線香のいい匂いが家の中に漂った。御経が終わると袈裟を畳みながら、「毎日お孫さんとご飯が食べられて、ここの家のおばあさんは幸せですね」と言ってくれた。姉が「母のお骨も長い間お寺に預けたままで、すみません……」と丁寧にお辞儀をして、少ないお布施を手渡した。直葬にした（それでも菊の花だけは仏壇はもちろん、お墓を建てる力がないと察しているようだった。心音は父に葬儀を知らせる気がなかったし、知らせたとしてもきつと来なかっただろう。どこかの

女と行方不明になっていた。

「お母さんに会いたければいつでも正覚院へいらつしやい」と玄関で言い残してから、僧侶は車に乗ってお寺へ帰って行った。

僕は最近、ばあちゃんは、僕を置いてきぼりにしていなくなったのではない、とわかるようになった。死の意味が――。人はわざと死ぬわけではない。

「祐介、今晚卵焼きにしようか？」と、台所でお坊さんの茶碗と茶托を洗っていた姉が、後姿を見せたまま言った。僕の頬がゆるんだ。姉も祖母を偲んで頬に笑みを滲ませたはずだ。

この姉が自分の部屋で泣いていたことがあった。傍に携帯が転がっていた。携帯が鳴ると、泣いていた姉は素早く手に取って耳に当てた。それから機関銃のように鋭い言葉を連発した。

「だから、もういいって！

祐介を好きになれない人とは付き合えないから。

違う？ 何が？ ふん、不幸なだけだと思っとる

が？ 弟をバカにしないで！ なにも知らない癖に！

障害者は健常者より不幸だと決めつけないでくれる？ 祐介には祐介なりの世界があるの。

言葉で表現できんけど、ちゃんと彼なりの哲学があ

るの。それを理解しようとしてもしない人だとわかって、これまでどおりの交際なんてできっこない。

ふん、『結婚を前提にしたお付き合いだった』やて？ こっちから願ひ下げや。二度と電話しないで！ さよなら！

言い終わると心音は襖ふすまに携帯を投げ付け激しく泣いた。狭い借家で大きな声は筒抜けだ。

自分のことが悪い方向で話題になっていると雰囲気でわかった。僕が弟だから心音は泣くことになるのだろうか？ 祖母が死んだとき心音は、

「ばあちゃんは、祐介が嫌きらになつて遠くへ行つたんじゃないよ。捨てたんじゃないよ。

どれだけおまえの傍にいたかつたことか。人には寿命があつてそれが叶わないから、星になつて永遠に祐介を守ろうと決めたんだよ。今は母さんと並んでおまえを守っているよ」と言つた。

母も祖母も空の星になつてしまつたが、心音がいたから僕は生き延びることができた。少しずつ元気になつた。しかし、僕の幸せが人の犠牲の上に成り立っているのではないのか？

心音が泣くのは僕のせいなんだろうか？ 言葉がない僕は慰めることもできない。

僕は姉の傍にいいのだろうか？

頭の中でいろいろな考えがふわふわとダストになつて舞つていた。その日、僕は淋しかった。襖に向かつて携帯を投げ捨てた心音は、今夜夢の中で空飛ぶ円盤を見るだろう……。

「祐介、行くよ」

今日も姉は声を掛けてくる。

玄関を出ると、ねずみ色に曇つた空だが雪は舞つていなかった。最近心音は「寒くなつて自転車に乗れんわ。川風が冷たくて……」と、三十分早起きして歩いて公立羽咋病院へ通っている。

土手沿いをふたり前後して歩きながら、心音が「寒くなつたねえ。そろそろ祐介の防寒着を出さなきゃ……」と言つたとき、携帯の着信音が鳴つた。

とつさに心音は手提げてさげから携帯を取り出し素早く耳に当てた。

「あー、茉莉さん？ 今ね、駅前のマーケットへ行くところや。夕飯の買い物よ。弟といっしょなが。そうそう、そやとことろ、わが家の日課やて。ね、それよ

りこの前のアレ、よかったよね。アレ、よう似合うとったがいね。素敵やつたよ。今度思い切って買うまっし」

僕は手をひらひらさせながら、揺れる尻尾について行っていたが、姉の耳元の携帯から漏れる甲高い声を聞いて、（あー、例の女性だ）とわかった。姉の職場の友達だろう。急になにが可笑しいのか姉が白い息を吐いて笑った。同時に相手のけたたましい笑い声が漏れてきた。僕は大人しく姉の後ろで立ち止まったまま、少々呆れて自然と頭を左右に振っていた。

——いつでも女どうしのあけっぴろげな会話なんて、（何を話しているのか僕にはわからないものの）とにかくこんなふうに姦しいものさ。

「雪になるげんて？ そんなら日曜日は少し早めに行こうか？ うん、うんわかった！ じゃまたね」

心音は話をやめて携帯を元どおり手提げに滑り込ませると、僕の方を振り向かず（僕が人の目を怖がるとわかってるから）

「今晚から雪だつて。祐介の冬のコートを出しとくよ」と言いながら土手を先に歩いて行った

——ああ雪か、雪が降るのかあ。

僕は雪が好きだなあ、とゆっくり体を揺らしながら

姉に付いて行つた。特に降り初めの雪が好きだ。天から降って来る白い雪は、宇宙から地球へ届くお便りみたいだ——。ちらちら降るのも美しい。懐かしい気持ちになる。誰かが僕にメッセージを送っているかのようだ。

僕にはこだわりがあつて寒い季節には、特別支援学校時代のダッフルコートしか着ない。中学三年生の頃の代物だ。高校三年間もずっとそれで通した。古びて生地が薄くなつた。着丈も短い。その代わり首にマフラーをぐるぐる巻きにする。擦り切れた生地の触った感じ、何よりも袖に三個ずつ付いている、お気に入りシルバーの円形のボタンに愛着があるのだ。

姉は「しょむない《みすばらしい》コートやなあ。みつともないから買ってあげる」とボーナスをもらう度に言うのだが、案外安あがりの弟で助かっているんじゃないかな？ ——これは僕の心の中の呟きでいいのだ。（言葉を言えなくてよかった）ふつうの弟のように、そんな言葉を口に出したら心音にひっぱたかれそうだ。

ジャンパー姿の仕事帰りの男性が二、三人、土手をこつちに向かつて歩いて来る。工場で仕事が終わって一杯飲み屋へも寄らず、真つすぐ土手沿いの家へ帰る

のだろう。僕は視線を合わさないようにしてすれ違った。

汐見大橋を歩いている途中、何だか胸がモヤモヤと熱くなつて、後ろから姉のジャケットの袖を引つ張つた。僕は胸の中の熱い塊りを吐き出すように「おはよう、おはよう、おはよ——う」と叫んだ。突然の場違いな大声に、僕らから橋の二メートル先を歩いていた主婦がびつくりした顔をして振り返つた。

『ひまわり障害者作業所』では、朝礼でみんなそろつて「おはよう」の挨拶をするのだ。察しの良い姉はすぐ「作業所？」とわかつてくれた。僕は頷いた。土手沿いを帰宅する労働者を見て忘れていた心の中の自尊心が疼いたのだ。それに、そろそろ施設長の頭の尻尾しっぽが恋しくなつていた。あの人の細かく揺れる馬の尻尾が見たくなつた。

「うん、わかつたよ。おねえちゃんが施設長に電話してあげる。また作業所の運転手さんに迎えに来てもらおうね。祐介はあんか《長男》やし、わが家の大黒柱や。けっぱれ！《がんばれ！》」期待してるよ」と、なんだか鼻に掛かつた声だつた。

ふと、泣いているのかな？ と思つた。

「ああ、よかつたあ。四十九日の法事が終わつてか

ら祐介は眠れるようになったね。お経のお陰かな？

正覚院の親切なお坊さんのお陰かも知れんね。ばあちゃんと三人そろつてご飯が食べられるようになったね。すっかり元気になったね。きつと、ばあちゃんも喜んどうわ。祐介が生き返つたみたいや。」

僕の肩を叩いて、心音は「やつぱり運動がいいんかな？ あんな古い体育館で何しとるん？ 利用者は少ないつて聞いたよ。誰かほかにも運動しに来る人があるんけ？」と不思議そうに声を掛けた。

僕は下を向いて頬笑みながら黙っていた。

祖母の四十九日が終わってから、僕が一人で行くようになった体育館——。

午後七時半に夕ご飯が終わると、姉は夕食の後始末と、翌朝の弁当の準備と、患者さんのために絵カード作りをしなければならぬ。

「近いけど一人で行って帰つて来られるけ？」と心配そうに訊いた。僕は手をひらひらさせた。

どんな体育館かつて？

古い体育館だ。少子化によって地方の小学校中学校が統廃合されたとき、なぜか小学校の体育館だけ解体されず川沿いの町に取り残された。そこで過ごした子供たちの喜怒哀楽、汗と涙、笑い声が、ひっそりした

記憶となつて床や壁に染み付いている。

ある日、体育館の中に入ると、ざわざわとした明るいざわめきを感じた。そこには宇宙人がいた。

体育館の入り口に、一目見て普通でない人が立っていた。後ろを振り向くと、昨夜降った雪が積もった道に僕一人だけのゴム長靴の足跡が付いていた。

——あの入り口に立っている人は、どうやって体育館へ来たのだろうか？

近づいて見ると、ほっそりしたグレイの裸の体はなめらかそうだった。いつか夢で見た円盤の内部と同じ色だ。雪が降ったというのに裸で寒くないのだろうか。死んだばあちゃんときつくりな痩せた長い手足だった。「やあ」というふうに三本指の右手を上げている。

僕に対するそのポーズに親しみが現れていた。真つ先に邪気のなさが伝わった。僕は「ふつうでない」ことに驚かない人種だ。指が三本しかなくろうが、顎がとっても細くて鼻がなかくろうが、つるんとした大きな頭に毛髪が一本もなく禿げていようが、そういう人もいるのだなと即座に受け入れることができた。地球に

も言語で文明を築いて来た人類の中に、僕のような言葉でコミュニケーションできない「ふつうでない」人間も混ざっているのだから、いろんな人がいて不思議じゃない。僕は成長過程において自分に照らして、いかなる「人」にも違和感を持たないようにできていた。

ただ生殖器がない、足の付け根の股の部分もつるんとしていてというのは、これは地球人のような動物学上の脊椎動物門哺乳綱霊長目ヒト科の人間じゃないから、男女の生殖機能によって繁殖する方法を持たない珍しい種であるということ、きつと（夢の中では見ることが出来なかった）宇宙人に違いないと判断した。じつと僕を見つめている。少し釣り上がった黒い大きな輝く目をしている。相手は身長が高いので僕は見下ろされているのだが、まったく威圧感がない。宇宙人の目が放射する友誼（ゆうぎ）のシャワーを全身に浴びているような多幸感があつた。僕は生まれて初めて生きている人物と目を合わせることができた。宇宙人の目を見ることはちつとも怖くなかったのだ——。

僕は入り口で長靴を脱ぎ、ダッフルコートの首に巻き付けていた襟巻をとって（これは祖母が編んでくれた大切な毛糸のマフラーだから）家へ帰るとき忘れることがないように畳んで玄関の、すのこの部分に置く

た。そして寸足らずのコートを着たままソックスだけの足で「彼」の後ろから古い木造の体育館の中へ入った。啞然とした。老朽化して子供たちがいなくなった体育館とは目くらましで、本当は内部が宇宙船だったのか？――

体育館にオレンジ色の眩い光が満ちていた。騒音がしているわけではないのに、いつもは乏しい蛍光灯で薄暗い館内が不思議なほど明るくにぎにぎしかった。宇宙人がいっぱいいた。「彼ら」の顔、姿態は同一で一人一人の見分けがつかない。戸口に立つ僕に気づいた「彼ら」も、体育館の入り口で僕を迎えてくれた宇宙人と同じようにいつせいに三本指の右手を上げた。館内一杯に歓迎ムードが爆発した。声はなく、言葉の代わりに口から盛んに「らせん」を吐いた。一人一人が、心音が友人から掛かって来た携帯で喋るとき空に向かって発語するように、顔を少し上向けて、口から空間にらせんを吐き出した。オレンジ色のらせんがいつせいに、くるくるくるくると天井に弧を描きながら（だから暗いはずの体育館が真昼のように明るいわけだ）次々とまるでミサイルのように僕に向かって飛んで来た。一つ一つが体にぶつかって、僕の体に入る度に、「やあ」「こんばんは」「よく来たね」「やっ

会えたね」と、人殺しと破壊を目標とするミサイルと違って、温かい歓迎の気持ちでテレパシーで伝わって来た。最初『テレパシー会話』に慣れていない僕は「らせん」をおでこで受けたり、後ろ向きになって背中であうたり、偶然お尻であう受けてしまった衝撃で、つんのめって転んだり、かなり苦労した。やがて少し胸を反らし、安定した姿勢をキープした上半身だけで胸の位置を上手に操りながら、一つ一つ温かみのあるすべてのらせんを、衝撃と共に胸の中に受け取ることが出来るようになった。言葉はいらない。らせんが言葉の代わりだとわかった。十八歳になるまで地球上の隣人こそ疎外感が強く、（姉や祖母を抜かして）僕は同胞と共感の持ちようがなかった。こんなふうに受け入れてもらったのは生まれて初めてだった。僕は宇宙人と遭遇したことが嬉しかった。生きていてよかったと思つた。ふつう宇宙人は目に見えないのだろう。「見える人」にしか見えないのだ。

――やっぱり思ったとおり、彼らはあの立派な宇宙科学博物館『コスモアイル羽咋』にはいなくて、このひっそりした粗末な体育館にいたのだ。僕を待つてくれているのだろうか？

その晩、僕は宇宙人とたくさん会話した。他愛ない話からシリアスな話まで――。

体育館の中央に僕が一人立って、周りを宇宙人が丸い円をつくってぐるりと囲んだ。暖房のない体育館で薄っぺらな生地の手足らずのコートだけだったが、天井に飛び交うらせんの熱気のお陰で館内は暖かかった。それでも衣服を着ている僕と違って、裸の宇宙人たちが風邪をひかないものかと気掛りだった。毛穴のないすべすべな体は地球上の蛇に似ていた。聖書によるとアダムは蛇の誘惑によってイヴの手を通して「知恵の実」を食べたらしい。その結果、アダムは知恵を得たが、労働の苦しみを伴う運命と死を背負うことになったという。

僕はいろんなことを話せた。宇宙人とのコミュニケーションは簡単だ。いつものように心の中の呟きでオツケーだった。言葉を声にして口に出さずとも自分の言いたいことがすみやかに相手に伝わった。テレパシーの素晴らしさだ。相手も音声で言葉を発せず、ぱつと小さな口を開けて天井に向けてらせんを吐いた。小さな口から飛び出したらせんがくるくるくるくる

と回転しながら空間を飛んで来るあいだに、僕の問いかけに対する喜怒哀楽の感情、冷静な科学的知識や情報、人類と異なる宇宙人としての意見が絡まって、オレンジ色のふくらみが徐々に大きくなり、僕の胸元まで来ると巨大な雨滴か涙の矢じりの形になって、一瞬間にすこーんと体に入り込んだ。体が熱くなって同時に伝言がじわつと脳へ伝わった。それに対して僕は（相手が宇宙人のせいかな？）なぜか健常者に対するときのような怖れや警戒心がなく、リラックスして自分の意見を自由に呟けた。お互い見た目は随分違うのに、心の垣根がなかったからだろう。僕はすっかり満足した。ふだん普通の人は毎日盛んに喋っていて（見ていて僕は羨ましかったが）言葉を使ってなにを伝え合っていたのだろうか？

よく考えてみれば言葉も兵器となり得る科学と同じだ。人を殺しもすれば生かしもする。姉は友達とつまらない会話で盛り上がりつつあるが、（あの時の携帯を襖にぶつけた事件は別にして）決して言葉で人を傷つけない優しい人だ。姉と同じように宇宙人の言葉（テレパシー）は、彼らにとって異分子である僕を傷つけないかった。テレパシーでコミュニケーションするのは本当に楽しかった。

対話の中で宇宙人は教えてくれた。

「我々は地球人に比べて大いなる文明と科学技術と倫理を持ち、空の彼方から地球人を観測しているが、決して自分たちが上位なのではなく、宇宙の意志において我々は（地球人も宇宙人も）同じ存在なのだ。

地球人は同胞どうしを様々な理由で差別しながらも、自分たち人間が一番偉いと思っている。我々宇宙人の存在を信ずることなく、空から見下ろす我々の視線も感じていない。人間はストレンジジャーであれ、同胞であれ、他者を排除すること」に長けている。なんと悲しい特質なことよ。とはいえ、我々も我々の棲む惑星で、地球人より遥かに優れた知性を持っている自分たちこそ一番偉いと錯覚する危険がある。幸い我々は、ひよつとして我々と別な惑星で、我々の科学や文明を上回る知的生物がいるかもしれないと想像できる。なぜなら宇宙は無量大だから。我々だけが、この広い宇宙の中で高度な文明を持ち、他の天体（地球）とそこに存在する知性体（地球人）に興味を持っているとは考えにくい。宇宙人は我々だけではないだろう——。

では、宇宙的規模で我々のような生き物が、それぞれの惑星に存在するのはなぜだろう。地球の人間はみんな一生のうちで一度は、『なぜ人は生まれてくるのだ

ろう』とか、『人間の存在意義とは何だろう』と考える。白人であろうが黒人であろうが、人種を超えた普遍的な問いかけだ。人類は約50年〜90年ごとに生まれ変わりながらそのことを延々と考え続けている。我々も地球とそこに棲む人類を観察しながら同じことを考えた。そして我々は宇宙には意志があるのではないかという結論に至った。

宇宙誕生のプロセスを見れば、宇宙の内部で星々が作られ超新星爆発がなければ、生き物の生命はありえず、地球人や我々の生命の存在を可能とする方向へ宇宙が進化したというその偶発性こそ、『宇宙の意志』と言えるのではないだろうか。不思議な力を感じる。地球人も宇宙人も壮大な『宇宙の意志』に隷属する一惑星人にすぎないのではないか？」

少し間をおいて、——（館内の明るいざわめきが一時止んだのだった）

「みんなが平等に命をいただき、一回生きるチャンスを得たならば、その『宇宙の意志』に応えるために、地球人も我々も何をすべきなのだろう？」と、最後に的確に胸に飛び込んで来たオレンジ色のせんの一本が、祐介にテレパシーでそう伝えた——。

雪が降りしきっていた。

来るとき付けた逆向きになった足跡が、うっすらと新しい雪で埋まっている。僕は祖母のマフラーをぐるぐる巻きにして、やや俯き加減に吹雪をよけてゴム長靴で歩きながら、『宇宙の意志があるとすれば、僕たちは何をすべきなのだろう?』というさっきのメッセージのことを考えていた。そして、その問いかけが宇宙人が僕に差し出した「知恵の実」だと気づいた。アダムのようにどんなにしんどい運命になろうと考えなければならぬ。

——これは今後、僕が生きている間考え続けなければならぬ宿題になるだろう。

後ろを振り向くと体育館の入り口で三本指の右手を上げた例の宇宙人が立ったまま、まだ見送ってくれていた。白い空間の中でグレイの姿が（吹雪のせいで）壊れたテレビに映る映像のようにちぎれちぎれに見える。オレンジ色のらせんが吹雪に時々掻き消されながらも輝きを失うことなく、ねずみ色の空をくるくるくるくる舞いながら僕をめがけて飛んで来た。

僕は強い風に負けないように両足を踏ん張って体を

反らし、胸で受け止めた。瞬間、軽い衝撃が全身をつらぬき、じいさんと体が熱くなった。

「また、おいで」

宇宙人のメッセージが脳へ伝わった。

へ了

〈参考本〉

『自閉症の僕の七転び八起き』東田直樹 平成二十七年六月二十五日発行 KADOKAWA

『空飛ぶ円盤』ユング 一九九三年五月六日発行

筑摩書房

『宇宙の意志に人間は存在するか』桜井邦朋

二〇〇一年十月三日発行 五月書房

※実在するものはあるがすべてフィクションです。

南の部屋

むらい
はくどう



ここは南側の物置部屋だ。客間だったが、二十年以上も使わないままにしていたので、物置部屋に替わってしまった。窓からは家の裏手の新緑の木々が見える。窓を開けると周囲の田んぼの清涼な風が入ってきた。せつかくの景色が窓の汚れで台無しだったので、ガラスの拭き掃除を試してみた。

次の号の同人誌に作品を掲載したいのだが、見通しが立たないでいる。どうしてもアイディアが出てこない。同人からはいつも似たようなことばかり書いていて、マンネリだと言われている。環境を変えていろんな場所で書いてみた。周囲に学生が勉強している図書館の学習席とか、ざわついている喫茶店で執筆してみたが、集中できないでいた。どんな環境下でも、書けないでいた。

春を向かえ、穏やかな気候となり、暖房器具が要らなくなった。この前、その部屋に暖房器具を仕舞おうとした時だった。会社勤めの頃は転勤が頻繁にあった。転勤時に利用していて、今は使わなくなった小型の食卓用のテーブルが、脚の部分を取り外して置いてあった。しかも、その部屋の一角には僅かな空間あった。テーブルに脚を取り付けて、椅子を備えると、静かでこじんまりしたワークスペースができた。ここが執筆

に適しているかもしれないという直感が働いた。昔からある家の、部屋と部屋の間を移動するだけなのだが、何らかの切っ掛けで環境が変われば、執筆意欲が刺激されるような気がした。

見方を変えれば、こんな古い一軒家であっても、喧騒に疲れた一部の都会人には、羨望の物件になりうるかもしれない。別荘なんか買える財力もないが、ここが避暑地の一室であることにするのだ。誰にも迷惑を掛けないなら、勝手に思い込むことは自由だ。要は考え次第だ。何よりも書ける環境になることを期待している。

ただ、ここが別荘の一室のような環境だとしても、期間は限られることになるだろう。もう直ぐ暑い夏が待ち構えている。夏になると南向きにある物置部屋は昼過ぎの日差しが入ると暑くて使えなくなる。そんな猛暑の時期がやって来るのだ。

エアコンを設置して、書斎にするかどうか迷うところだ。物置を書斎にしたとしても、確実に執筆ができるかは不明だ。エアコンの初期投資が無駄になるかもしれない。今まで、執筆用のパソコンを頻繁に買い換えてみたのだが、効果は皆無で、どれだけの無駄遣いをしてきたことだろう。今回もそうなる可能性がある。

窓から眺める木々で避暑地が連想できる。ただの物置部屋が別荘地の書斎になり、ここが執筆に適した場所になるかもしれない。この物置が書斎になるかどうかは、書かれた文章の内容次第なのだ。何でも飽きっぽくて持続性がない自分の性格に辟易としている。今回の件もそうだが、せつかくエアコンを設置しても設備投資が無駄になることを懸念しているのだ。

もし、ここで上手く書けたなら、この物置部屋にエアコンを設置してみよう。この爽やかな日々の間に作品を仕上げてみよう。書けなければ物置のままにしておく。この部屋の小空間の中で、効果があるかどうか、試してみるのだ。

時々、自分のことを考える。持続して書けたためしがない。書くために資料を読み込むことをしない。そもそも材料集めとかをしない。取材する気概がないのだ。書けない要因は書斎のあるなしではないのだ。要は文才がないからで、書く材料があっても活用できないからだ。

さらに言えば、既に自分の部屋はいくつもある。作家を気取ってレイアウトした部屋もある。大工さんに天井まで何段もある造作本棚を設置してもらい、広くて大きなテーブルを備えている。その部屋に籠もって

いると、鬱屈とした気持ちになるだけだった。書斎があるのに、居心地が悪いからと、執筆を避けてばかりいる。最適な環境下でも書き続けられない情けなさがある。考えてみれば、これ以上部屋を必要としないのだ。

と、ここまで書いた文章をUSBメモリーに保存した。

今までAIを使うことにはプライドが許さないでいた。だが、自分の力のなさが自覚できた。だから、AIの助けを借りて書くしかないのだ。未だ実行していないが、「季節は春」「物置部屋から書斎へ」「書くスペースの確保」「文才のない自分」とAIにメッセージを送ってみると、どんな文章が完成しただろう。

ここまでの文章を全部クリアして、新規で開くことにした。

①ある時、ある運動公園の入口付近に倒れている男がいた。良く見ると自分にソックリだった。ゾツとした。もう一人の自分が倒れていたら、現実ではないと思った。それでも、どうして倒れているのか知りたくなった。勇気を振り絞って尋ねてみた。

②「もしもし、どうして倒れているのですか？」

「倒れているって？ お宅は誰です？」

③「私は通りかかりの者です。普通倒れていたなら、声をかけませんか？」

「いえ、今の時代は何に巻き込まれるのかわからないので、声かけなんかしません」

④「そんなことより、テニスとペニスは一緒なんですよ」と男は言った。

AIに「ナンセンス」、「シュールなコントを文字だけで表現してみて」さらに「ペニスじゃないよ。テニスだよ」と、いつも言っている冗談をAI宛メッセージ欄に入力してみた。すると、このようなショート・ショート風の文章をAIが作成した。

何でそんな下品な文章を入れてしまったのだろう。

AIに対しての屈辱感から「これはできません」と言わせたかったのかもしれない。二人の男が文中のような会話を発したのは、設定上の登場人物を指定しなかったからだろう。作中のナンセンスな会話から、自分とAIの思惑を推察してみる。テニスで身体が動くかどうか、精力の度合をはかるバロメーターとなり、テニスがでなくなったらセックスもでなくなると

いうことらしい。作中の倒れている男の言うことは何かの暗示なのか、ただのナンセンスなのか、判断がつかないでいる。どうして、AIはそんな文章を作成したのだろう？

自分は手先が不器用だ。絵は全く描けない。デッサンなんてもつての他だ。ただ、文章でなら、何とか表現できるかもしれないと思ってた。以前の自分だったら、目の前の情景を単語や言葉で描写し、文字化を繰り返した。AIに依頼するだけなら、そんな作業さえ要らなくなるのだろう。

AIが創り出したナンセンスな情景は、画ではなく、文字だけのショート四コマだった。だけど、結末が曖昧だ。最低限の起承転結は必要なのかもしれないのだが、AIは苦し紛れな場面にしか仕上げられなかった。AIは辻褄の合わないナンセンスを認識しないのかもしれない。ショート四コマにタイトルが付くのだろうか？悔しいので、人間にしか思いつかないような、全く無関係なタイトルにしてみたらどうだろう。「テニスの森」がいいかもしれない。

操作していた手を止めて、ディスプレイの画面に目をやり、ここまで書いた文面を振り返る。

以前、生成AIに頼らず、一から自分で立案して、

最後まで書いてみようとしたことがある。だが、全くダメだった。自分とAIとの執筆能力の差を比べてみた。アイディアが全く出てこないことを認めざるを得なかった。AIを使わないでやろうとした、チャレンジ精神だけは讃えられる。だが、能力差が歴然としてある。AIに到底勝ち目がないと判断し、負けを確信した。深くAIの傘下に下るしかなかった。

今後もAIなしでは書けないだろう。AIが創るものは自分には思い付かない発想だ。AI頼みになり、最終段階に到達する前から、自分が関与する余地がなくなるのだろう。そして今後も、AIに依頼するしかなくなるのだ。

AIに数多くの項目を入力した。画面には次のようなメッセージが流れた。

「私の語りが文字に変換され、こうやって画面上に表示されています。そして今、こうやって表示された文字をあなたは見ているのです。そんな当たり前のことをなぜここで述べるのかということですよ。」

私は今、人工知能によって書かれています。私がどこの誰だとも語られていません。どんな風貌をしているのか、年齢はどうなのか、男性なのか女性なのかもハッキリしていません。確たる存在を与えられていな

い私が、文字の羅列によってここで語るのです。

形のないAIである私は、人間のような喋り方を学習しました。そしてこれから、ここに登場する男が、未来を想起するのです」

その男は素粒子で構成されているこの世から、反物質とダークマターの狭間にある別宇宙の彼と交信していた。

彼のいる場所はダークマターで構成され、地球とは時間の単位が懸け離れている。いや、時間という概念が全くないらしい。男の側には時間はあるが、彼とは認識のずれがある。事象の中を、時間が不確定なまま推移しているらしい。

だから、彼はいつの時代の者なのかわからない。男は彼と交信しているのだが、そもそも彼は時間など認めていないのだ。しかも、自分だけという個人の意識がない。個が全体に飲み込まれているので、全体の中から抽出されるように意識が浮遊する瞬間がある。人間でいうところの魂のようなものが、瞬時に合成されることがある。それが、彼だ。そして、彼は伝えてくるのだ。

何兆分の一の確率の中で、瞬時の同時進行がある。

複合した世界が重なる瞬間でもある。たった一つしかない男の世界の中であつても、意外な展開がある。三次元が移動する四次元空間は、とどまることがないのだから、ダークマターと並列になる割合が量子数的確率で存在する。三次元に属する地球と共振する場合がある。つまり、ダークマターと同期することなのだ。

持つて生まれてその世界を察知できる人間がいる。

宇宙原理を知るには大変な修行が必要なのだ。宗教の大家であつても悟りを得るだけで現世は変えられない。人々に全宇宙の原理を教え諭すことしかできないのだ。

特殊な受信装置が脳に組み込まれている人間もいる。ダークマターと同期する瞬間に未知の科学知識を伝授される。それが人類の科学的進化の源だ。そんな能力を多くの人は持たない。

能力のかけらもないのが、その男だった。だが、なぜかその男は、文学的な確率の中、特殊な場所での別世界と通信ができたのだ。物置を書斎に改造した部屋に入った時からだ。今振り返ると、彼と交信できるようになったのは、偶然のようで必然だったのかもしれない。

予めプログラムされていて、それは宇宙法則の一部のようなものだった。ラッキーなことにその男はたま

たま交信できるエリアを見つけられたのだ。それでもそれは予定調和に沿ったものだった。だから、こうやってその男の記録ができています。

彼のいる場所は、終わってもいいが、始まっていない世界なのだ。そこは諍いは必要なく、意識が一つに統一されていて、全ての意志や認識が共有されている世界だった。彼にその世界のことをもつと聞いてみたいと思った。男は頭の中で念じてみた。

「もし、そっちの世界の概念がこちら側に浸食してきたら、どうなるのだろうか？　世界から戦争がなくなることになるのかな？」

あつちの世界の彼はこう答えた。

「逆だよ。我らは紛争が無くなったら面白くないと思っている。私らは波風の立たない静謐で平穏な世界にずっとじっとしているだけなんだ。君の世界観の一秒が、ここでは何億年という単位なんだ。こちらからすると、地球上の争いごとなんか、出来事のうちに入らないのだ。」

君は自分自身を生命体として認識し、意識を持った生き物というつもりでいる。生きているという自覚から、自分には意識があると思ひ込んでいて、そこが現実に見えるのだ。そこにいる君から見ると、ここはあ

の世と言われている世界だ。ここは暗黒空間の世界だ。現世が表だけで、そこが正しい世界だと勘違いしているようだが、明と暗の関係でしかないのだ。明の世界から見るとここがダークマターというところになる。

この世とあの世は、単なる表と裏、明と暗の関係ではない。裏の世界にも、似ていて非なる物理的な存在がある。表だけでも、裏だけでも成り立たない、文字通りに表裏一体なのだ。

ワームホール原理で繋がっている訳ではない。ただ、ある波長によって表と裏の世界が重なり合うことがある。暗黒物質の中との通信が可能になるのだ。こちらの世界では、現世の矛盾する姿として、反面教師的事例として、君のいる世界が参考となる。

しかもだ。AIの活用が、こちらからの情報操作の、片棒を担いでいる。そのことはあまり知られていない」

「ここまでが男の経緯です。これ以外にも男自身が記した享年の文章が残されています。その男のレポートのタイトルは『闇魔大王様への上申書』となっています」

彼のいるあの世へ移動中だ。昔は小舟に乗って川を渡っていたらしい。今はトロッコ型の水陸両用のボートのような乗物に乗っている。たぶん、男は川のような箇所をこれで移動してきたと思われる。

四角い乗物に乗ってゆっくり動いているだけなので退屈していた。構造改革の一環として上申書のレポートの提出を義務づけられている。タブレットに書ききして、レポートを提出することになっている。タブレットに書ききするなど、男は慣れていない。練習がてら、その乗物のことから書き始めてみた。これがその文章となる。

舟の下にはレールのような物が敷かれていた。リニアカーのように線路の上に浮いていて振動が全くない。その乗物はトンネルの中の分岐点に向かっていた。

人間の共通幻想として閻魔大王のような彼がいる。今彼は、A I仕様の閻魔大王になっている。そのA Iの大魔王によって審査されるらしい。キリスト教やイスラム教などの宗教でも似たようなシステムになっている。地域や人種地域を越えて存在している。国によって制度が違う場合もある。どの宗教も共通化されつつあるのだが、閻魔大王に似たものは人間の幻想からの創造物に変わりない。だが、たまに人種や民族、国

家観によって、集団幻想の認識が若干違う場合がある。

宗教は人間のイメージから派生するものなので判断が曖昧になる。その制度的相違の隙間を利用して、閻魔大王に賄賂を渡す人が出てきた。財力によって地獄行きを免除される事例が出てきた。元々、地獄があるかないかは人間の思い込み次第だった。それなのに、死んだ後でも格差社会の影響下にあることが問題となった。問題が顕在化した後、三途の川以降からの審議記録の開示請求が認められるようになり、閻魔大王の閻魔帳と死者のレポートが突き合わせて閲覧ができるようになった。地獄行きを宣告された死者は、自身の閻魔帳の履歴を、一度だけ閲覧できる制度が取り入れられた。閻魔大王が、口頭だけで審議内容を告知していたので、記録に残らない不備の改善がなされたのだ。被告人は上申書に生前の心境を書いてもいいことになった。過去に起こした罪を本人なりに弁明していいのだ。要するに言い訳を並べることだ。

その男は思った。その男は自分自身でもある。

(どうせ、当局に検閲される前にA Iによって文章が改竄かいさんされることだろう。天国など最初から存在しないのだ。死んだ者は、そのうち生き返り、現実という地獄に再び陥るのだ)

男は、自身の本心が改変される前に、元のデータを残しておこうと思った。

（メモリーにレポートの元データをコピーしておこう。今、ここで書いている文章が換えられることがあっても、元データまで暴かれることはないだろう。これが、本心を書いたレポートのつもりだ。が、待てよ。本心？ 世間の風潮に流されて意識や信念がコロコロ変わる。コロコロ変わるから心と言うのだ。AIに頼った副産物が常習となりつつある昨今、本心がどこにあるのだろうか？

元データは、つまらなく生きていた現実でしかなかった。空虚な現実の記録をAIで脚色してもらった方がいいのかもしれない。どうせ、人生は幻影なのだ。AIによって過去が充実したかのような錯覚に陥ってもいい。後々、それが錯覚であることを証明できるからだ。そのためにも、こうやって本心のかたちを書いておくのだ）

男は過去の自分を頭の中でイメージしてみた。今までのことを頭の中で想い出してみた。だが、どれがいつのことだったのか、どこでだったのか、判然としないのだ。

ある別の場所に着いた。

大柄な闇魔大王に似せた造形物から、文字を語るように、デジタル音声が流れた。上申されたレポートの、審議経過がここに明らかになるかもしれない。

「君は現実をつまらないと思っていただけなのだ。世界中の各地でその日の食べ物さえない人たちがいる。紛争で住む場所を追われている人がいる。その人たちにとってはつまらないと思っている君の日々の営みさえ、人並みの幸福だと感じてるかもしれない。つまり、幸福には各個人によって受け取る基準差がある。

つまらないと思っている現代人が多いのは衣食住が足りているのにさらに高い満足を得ようとしているからだ。人間には向上心があるから、同じことをやっていては満足を得られないものなのだ。現状に満足できないと不満を持つのではなく、幸福度の基準を下げてもいいのだ。日常の満足度のレベルを下げることで。ということとは、思考の更新時に多少の劣化があってもいいということだ。平凡な日常でも幸福だと思えるような思考回路に戻すことが必要だったのだ。

君は晩年になってから、日常を負荷に感じ、何度も心情をリセットしようとした。だが、立ち直れなかった。煙草は元々吸わなかったのは、僅かな煙草賃を支

払いたくないだけのケチだったからだ。以前は禁酒で
きる意志があったようだが、最近は何酒ばかりしてい
て、怠惰なままだった。禁欲の気配がなかった。生き
る負担に負けて、ヤケになっていたのかい？」

男はこう答えた。

「いえ、そんなことはありません。切っ掛けがあれば
酒を止めたかもしれません。何日我慢したら何日の寿
命が延びるといったような、基準がハッキリしてい
るなら、酒も我慢できたかもしれません。いつ自分が死
ぬか予測できなかったからです。人間にはいつ死ぬか
わからないから、我慢することもないと思っただけです。
どうせいつか死ぬ。死ぬのが十年後かもしれないし、
明日かもしれない。見通しのない時間は息苦しいので
す。そう考えだしたら、酒を我慢することはないと思
ったのです」

「そんなことを考えていたのか？」

「もし、いつ死ぬかわかっていたら、期限内に好きな
ことをやっていたかもしれません。そうしたら酒を飲
むかもしれません」

「どっちにしても飲むんじゃないか。近年のように情
性に流されて飲酒を続けることはなかっただろう？
病気になった経験があるのに酒を止めようとしなかつ

た。なぜだ？」

「老いた身体を酷使して懸命に動いた時、疲れを軽く
したかったので酒を飲みました。何の楽しみもない自
分に潤いを与えたかったのです。業的（ごうてき）な日常の中で、
酒が美味しかったことがあります。その時の感覚が忘
れられなくなったのです」

「それで、最近飲んだ酒は美味（うまい）だったのかい？」

「いえ、美味くなかったです。風呂上がりで缶ビール
を飲みました。その後、日本酒を飲んでみました。美
味しくなかったのです。たぶん、体調に合わなくなっ
たのかもしれません」

「そうだろうね。心身に適当なストレスがあるから酒
を美味しく感じるのだ。人間は働いた後しか酒を美味
しいと感じないようにできているのだ。肉体や頭脳労
働で若い頃は心身とも無理が利いた。今は充実感の伴
う労働はしていない。そうだろう？」

「そういうことなんですかね。なるべく動くようにし
ていたんですけどね。年をとってからはいつも疲れが
とれなくて、ついつい常習的な飲酒になってしまった
のかもしれない。精神的なものがあるかもしれないま
せ

ん」
「今となつてはもう遅い。死んだのだから諦めるんだ。

それは仕方ないとしても、酒だけに留めておけば良かったのだ。それなのに性交まで行った。だから、地獄行きの沙汰になるのだ。君に納得してもらうために諭すのだが、快楽だって同じだ。もう年老いたのに、酒と同じく若い頃と同じ快楽を得ようとした。だから、娑婆^{しゃば}で間違いをしでかしたのだ。薬を使って淫靡^{いんぴ}な行いを続けた。そうだな？」

「はい、そうです。酒が美味しくなくなり、性行為が生きる唯一の楽しみになりました。最高の快楽となれば死んでもいいと思っていました」

「じゃ、思い通りになったではないか？」

「いえ、最高の快楽ではなかったです」

「だから、そうはいかないんだ。自分の体調を考えてみるんだ。若くはないということは生殖能力も衰えている。喉が渴いていてもビールが美味しく感じなくなったのと同じだよ」

「どこが一緒なのですか？」

「発情した雄は麻薬並に気持ちが悪くなるから暴走するのだ。精子を拡散すべく役割を与えたために快楽を伴わせた。年老いた生殖能力の衰えた雄には精子の劣化も著しい。劣性遺伝になる危険がある。役目がなくなつた雄には快楽が伴わなくなる。それは自然の摂

理だからだ。人間だけが変な薬まで発明して、回春効果を求めている。君は不能なのに煩惱が残つたままだった。薬を使ってまでも性交したいという、間違いをしでかしたのだ。それと、年老いても性行為を止めなかったのは不純な成功体験が根本にあったからだ。身に覚えがあるだろう？」

「昔、淫行を行ったことですか？ あれはだいぶ前のことで、もう時効でしょう？ 若い頃から性不全症だったけれど性的接触を求めていました。たまたま、出会い系マツチング・アプリで出逢つて、性交が成功しました。あ、駄洒落ではありません。すみません。あの時も、ついつい調子にのつてしまい、十八歳未満だということを自分は知らなかったのです。それに生理中は妊娠しないからと言ってみただけで、同意するとは思つてなかったのです」

「無知な相手が、何でも言うことを聞いてくれるので、あれこれ要求して、いろんなことをした。ここでは記録に残る。ここで発言してしまうと、修正のきかないレポートになり、審議記録になってしまう。だから、発言を控えるが、あんなことやこんなことなどした。それも記憶があるだろう？」

「若い女を金銭で片をつけ、いろんなことをしたから

ですか？」

「そうだ。君は今でもその時の快樂を享受したいと願っている。年をとったから、もう無理だろうと自覚しながら、性行為を画策し、実行し続けた」

「そんなこと、誰でもやっているではないですか？」

「それにもう罰は受けてます」

「どんなことだい？」

「快樂度の強い記憶が残っていることです。昔の体験から普通の性行為に戻れなくなっているのです。酒と一緒にです。昔の悅樂を知っているからこそ、味気なくて、喪失感があるのです。過去に尋常でない快樂を体験したことで、普通では満足しなくなつたのです。それは、現実での苦しみです」

「普通の性行為ってなんだ？」

「普通とは平均的な性行為のことで、年相応の男女間で行われる性行為のことです。生殖に繋がり、人類にとって生産的なことが普通なことです。それ以外を世間の多くの人々が、異質と判断するのです。

あれは中年の頃で、昔のことではないですか？ 大人が快樂を追求して何が悪いのですか？ やっぱり、時効は設立しませんか？」

「時効の成立は難しいな。ただし、一旦であるが、君

の独断的な申し開きを受理する。淫行という罪に対して、既に苦しんできていて、普通の性嗜好に戻れないという罰を受けているのだな？」

「そうです。審議のほどよろしく願います」

「君は身に余る資産を持つ大富豪でなくて、小金持ちのままだったから良かったのだ。金があれば自分に足りないことはないと思つてしまう。地獄の沙汰も金次第が通ると思つてゐる。富豪でなければ人間の頭の中にある煩惱は実行できないだろう。一般庶民は現実の障壁を打開できるだけの資金がなく、実行が無理だと判断できるからだ。何百億円という資産を持つ富豪なら、背徳な欲求でも実現できないことはないと思つてしまふ。そんな実現意識を持つ者がいるから厄介なのだ。獄中で死んだあの世界的富豪がそうだった。児童買春なんか、それこそ普通の人にはできないことだ」

「あれはやり過ぎだと思ひます」

「そうか、君は変態だが、過度の実行者ではなさそうだ。現在の心境も考慮することにしよう」

このような審議内容だったような気がする。臃おぼろげな記憶から文字を起こして記録している。ここまですを振

り返ってみる。AIの大魔王だから公平なのか、人間ではないから人間の感覚がわからないのか、良くわからない。どっちにしてもこの文章はAIに改竄される。

これで、レポートの下書きを終えた。これで、ここからおさらばできる。ワープロソフトで清書して提出するため、もう一度読み返してみる。間違いが気づけば校正も必要だろう。慎重な文面でなければならぬ。二度と再審は利かないからだ。

期限はあるのかって？　ここでの一秒が現世で何億年という説は信じられない。ただ、すぐに現世に生まれ変わることもあるが、そうではないことも確かだ。次の人生がこのレポートの展開次第で左右されるらしい。どっちにしても現世に行く。「それでは永劫回帰だろ。本当の終わりはいつだ？」と疑問を持つかもしれない。それはジプシーが砂漠を旅することに似ている。旅人に尋ねると「終わりなどないさ」と答えるだろう。人間の営みにも終わりはない。人生という夢の中で、終わりのない旅が続く。どこで終わるのかって？　その質問はこのレポートの提出期限と同じで決めるはない。終わりにしたい時が終わりなのだ。

前方に地下のトンネルのような通り道がある。蠟燭の灯がないのに前方が見えるのは、穴の周囲が蛍光物

質で発光しているからだろう。遠い記憶のような曖昧さがあり、前に通ったような気もする。少し歩くと二つに分かれる。どちらの方向にしても、望まないところに行き着くのだろう。

レポート提出の結果で行き先が変わる。それでも、現世に再び行くことに変わりはない。前にも通った記憶がある。何度でも現実に戻るだけだったような気がする。審査によつては生まれ変わる生き物が違う。小さな虫になっていて、交尾をする前に一瞬で踏みつぶされたこともある。命の誕生と消滅がある分だけ、行ったり戻ったりする回数は無限になる。

通過するトンネルのような穴は左右の二択ではない。穴は量子的に分岐しているのだ。無数の世界に通じるような仕掛けが施してあるらしい。その仕組みは修行を積んだ高僧なら理解している。悟りを得られるまで現世と死者の世界を何度も往復しなければいけない。現世に何度戻つても、地獄のような試練に耐えなければならぬのだ。何回も往復して、やっとその道理がわかりかけてきた。それでも、まだ本当に理解したわけでないから、この先まだ何度もこの穴の先を通ることになるだろう。

わかってきたのは、このトンネルの先に、パラレルワ

ールドが無限にあることだ。この道を何千、何万回通ったことだろう。似ているような世界だったこともあるし、全然違った世界だったこともある。

一番驚いたのは核戦争を終えた後の世界へ行ったことだ。人類の存続の危機だった。あの時、人間を含めた哺乳類が、絶滅してしまう寸前だった。地球生命の進化が爬虫類や両生類時代まで遡るかもしれないかったのだ。

人間には攻撃性があって同類でも平気で殺す生き物なのだ。増えすぎた固体数の調整を行うことは生物界では珍しくないのだが、放射能のせいで生殖に関した遺伝子まで異常を生じさせ、まさに人類が滅びそうになったのだ。

地球上の環境は最悪だった。地下に生存場所を確保しようとしたのだが、適応には困難があった。他の惑星に移住した人類がいたので、里帰り制度を活用して種の保存は保たれ、何とか絶滅危機種を免れた。長いあいだ人類全体に閉塞感が漂っていた。あの世界にはもう二度と戻りたくない。あの時こそ地獄そのものだった。地獄にいる以上に長く感じられた。

この先の穴を通った回数を数えたわけではない。地球に生命が誕生してからのことだから何十億年の中での

ことだ。だから、数えきれないほど通ってきたかもしれないのだ。生誕の記憶などは曖昧至極なのだが、それだけの回数だと、遺伝子単位でDNAに記録されているのかもしれない。この地下の風景を見ると微かな記憶が戻る。

いずれ、先ほどの閻魔王の所に戻るのだろうか。もう、何回審判を受けたのか数えきれない。レポートだつて出したかどうかは覚えていない。ずっと前は口頭だけで済んだこともある。ただ、軽率に扱えない。そのことは身に沁みている。いい加減な受け答えをしたせいでとんでもない世界に行かされたのだ。あの時はえらい目にあつた。強烈な印象だったので、ここを通る時に思い出すのだ。

このレポートは試作段階のものだ。これを書いている男が、南向きの部屋でレポート作成に努めている。ここまでを再読し、推敲しようとしていた。

男はふと、壁を見た。普段使わない家具や電化製品のあいだから、壁紙が剥がれているように見えた。良く見ると、だまし絵のような立体的な奥行きが壁に出現した。暗い穴があり、遙か日常に続いていた。

合評会案内

一、日時 二〇二六年 十一月一（日）

午後二時二十分

二、場所

富山県民会館 六〇八号室

富山市新総曲輪四番一八号

TEL (076) 4321311

読者方々のご出席を歓迎します。

あとがき

★今回の号から門倉(坂下)さんが加入されることになりました。早速、校正等でお手伝い頂き大変助かりました。この場をかりてお礼申し上げます。今回は載せられない同人がいて心配しましたが、実力者の門倉さんの加入で発行がスムーズに進みました。次の号からは全員の力でより隆盛なる「繫」にしましょう。

(村井)

★日本のみならず世界においても近代文学の主要たるテーマの一つに「父と子の関係性」がある。確かにそのテーマに沿って書かれた作品に、誰もが認める名作と呼ばれるものが多い感じがする。一方で、「母と子」をテーマにした作品というのはどうなんだろうか。私の乏しい脳内ライブラリーに思いつく作品が見当たらない。それならば、自分で書いてみたらどうだろうか。そう思い立ったのが今回の創作の原点である。私は今まで父について作品を書いたことがあるが、母については初めてである。マザコンと思われまいだろうか。

私の母ははまだ存命で、齢八十四歳になる。このあとかきの文章を書いている段階で緑内障の手術のため入院しているが、本人は九十過ぎまで生きるつもりだ

と豪語している。いつまでも達者でいて欲しいものだと思う。

(内角)

★飯田氏が終わって、親平さんも書けなくなったという。時が流れた、というのだろうか。ここまで書く、野島さんところで、酒を飲みながら談笑していた、いやいや、ほとんどけんかにもなるまで言いあっていた「渤海」の時代を思い出してしまふ。今度の「繫」はとても薄いものになってしまったと言う。頑張らなくてはいけない。まだまだ続けよう、つなげよう！ 次の号からは、もっともつと長いのを出します。同人誌は同人にとって、人にもよるだろうが、唯一真実に生きられる場所なのだ。博道ちゃんも頑張つて、シュートちゃんも頑張ろう！ 新しい人も頑張つて、まだまだ、「繫」をつないで大きくしていこう！ いこう！

(深井)

★「ハブ人間」とはなにか。毒ヘビのハブではなく、ハブ空港のハブ、パソコンの電源が集中する部分のハブと受け止めて頂けるといい。前編では、ハブ人間らしい人は誰も登場していないし、密集する巢も出てこ

ない。ギャンブルののめりこみと借金の葛藤ばかりである。次回の中編でようやくハブ人間らしい人が出てくる。タイトルらしくまとめていきたい。

(藤野)

★「境界線」

「クマに襲われる夢を見た」と義理の姪から電話があった。「黒々とした大きなクマの口の中が真っ赤だったんよ」と言う。喋り方が本当に襲われたかのようにリアルな感じだった。よほど怖かったのだろう。

数年前から白山の山奥に生息するはずのクマが山から下りてきて白山神社や鶴来町の住宅街をうろつくようになった。畑をする人や、早朝散歩する老人の人身被害も出た。手取川の豊かな水の恩恵と山の濃い緑に魅了されて鶴来町に移住した姪はおびえている。本当は子供のいない夫婦の引っ越しの原因が姑さんのプライバシー侵害に対して境界線をはっきり引くためだったと私は知っている。アーバンベアの出現は、地球温暖化によるエサ不足、人口減少による森林、耕作放棄地の増加など人とクマの境界線が曖昧になったことが原因らしい。(やれやれ、今度はクマか……) 私は姪が気の毒になった。彼女は金沢へ戻るだろうか？

(門倉)

執筆同人 (五十音順)

池田 良治

金沢市辰巳町

冷泉 遥

滑川市上小泉 毛利方

寺本 親平

金沢市弥勒町

内角 秀人

富山市中市 中井方

深井 了

高岡市扇町 関口方

藤野 繁

富山市婦中町

むらい はくどう

富山市馬瀬口 村井方

門倉 まり

金沢市富樫 坂下方

新同人を募集しています

当誌は創作を主として掲載します。
新同人として参加をご希望の方は、
編集発行人までご連絡ください。

編集ボランティアを募集しています

編集・レイアウト・製本までのノーハウを伝授します。
興味のある方は編集発行人までご連絡ください。

繋 第十一号

発行日 二〇二六年 一〇月一〇日

編集発行人 村井博道

連絡所 〒930-1301

富山市馬瀬口三二〇 村井方

TEL 076-483-0402

ホームページ・アドレス

tunagu012.stars.ne.jp

印刷所 ちよ古つ都製本工房

頒価五〇〇円